HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「西東詩集・ズライカ書」について
Author(s)	小栗, 浩
Citation	北海道大學文學部紀要, 11, 95-133
Issue Date	1963-02-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33273
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_PR95-133.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「西東詩集、ズライカ書」について

小栗浩

「西東詩集、ズライカ書」について

小栗浩

Wer von der Schönen zu scheiden verdammt ist,
Fliehe mit abgewandtem Blick!

Pandora 761~762

はしき人より別るる定めおいし者は
おもてそむけてのがれゆくべし。

一、「西東詩集」への展望

一八〇八年、「親和力」を書きおえたゲーテは、自己の創作活動が一応の結着をみたことを感じていた。今や六〇歳となって、かつてのような抒情詩がもう一度花を咲かせるという期待をもつことはできない。叙事詩においては取材の困難を深刻に感じないわけにいかなかった。演劇もまた彼の興味をひくものではなくなっていた。イタリア旅行によって学びとった古典主義の様式は、「イフィゲーニエ」(一七八六年)、「タソー」(一七八九年)、「ローマのエレギー」(一七九〇年)、「ヘルマンとドロテア」(一七九七年)等において頂点に達するが、それはもはや彼の心をもえたたせることができない。戯曲では「エルペーノル」(一八〇六年)や「パンドーラ」(一八〇八年)が、叙事詩では「アヒレーイス」(一七九八年)が、いずれも断片に終っていることは右の事情を証明する。一八一一年から書きすすめられた「詩と真実」は、自己の青春を回想し、その存在の意義をたしかめる仕事であったが、それは同時に、彼が立っていたこのような精神の境位を示すものに他ならない。(1)

が彼の創作活動の停滞は、単に彼の内面における芸術的態度にのみよるのではない。フランス革命以来、彼は外界のはげしい動揺を目の前にし、のみならずその動乱のなかにわが身をおいてみさえしたが、その体験は彼の創作欲を効果的に刺戟することはできなかった。この大事変が世界史を劃する重大な意義を有することを認めながら、もともと「混乱をがまんするくらいなら不正を犯そう」(2)といった彼にとって、この動乱を積極的な目でみることはできなかった。革命に取材する一連の作品「市民将軍」(一七九三年)、「激昂せる人々」(未完、一七九三―四年)が、にえきらない中途半端なものに終っているのはそのためである。「滞仏陣中記」(一八二二年)のなかで、戦に敗れ意気消沈したドイツ兵に対して、「ここから、また今日から世界史の新時期が開かれる。そして諸君はそれに参加したということができるのだ」(3)と語った激励の言葉はあまりに有名であるが、しかしそれは実は空しい響きをもっている。戦乱の渦中にあって、彼の心は遠く戦乱をはなれていたのである。が彼が時勢に無関心だったのは、単に彼が混乱を憎んだためだけではない。また彼の立場が戦をこえる世界市民性にあったためだけでもない。やがて反ナポレオンを旗印にしてドイツに解放戦争が起ったとき、彼

をして一篇の愛国詩をも書かせなかったのは、何よりもドイツが立向った当の敵ナポレオンに対する彼の個人的な感歎によるのであった。ナポレオンはヘーゲルにとって「世界精神」のあらわれであったが、ゲーテにとって彼は「世界の綱要」(4)(Kompendium der Welt)であった。歴史を推進するデモーニシュな英雄は、その行為の是非善悪を問わず彼の心をひきつけてやまなかったのである。しかも彼は、ナポレオンの没落とともに、ひるがえってドイツ国民に組するような態度を見せはじめる。彼は、ドイツの勝利を祝うために書いた「エピメーニデスの目覚め」(一八一五年)において、

「だが私は自分が眠っていた時を恥じる、
諸君とともに悩むことこそよかったのだ」(5)

という。そうして、この戯曲を彼に依頼したイフラントにあてて、「…いかに私が国民と悩みと喜びを共にしたか、今も共にしつつあるか、その気持を国民に表明すべき機会を与えられたことを衷心から感謝する」(6)と書いているのである。もし彼が、世界市民の立場から戦を超えているのであったら、自分が眠っていた時をあえて恥じる必要はなかったであろう。それはあきらかに、現実に対する彼の妥協であり屈服であった。しかし、世間に対する体裁はそれでととのいもしようが、むろんそれは彼の心を真に満足させるものではなかった。ドイツ人の勝利を見て己れの不明を恥じ、不敵な英雄を奈落におとしめはしても、ゲーテの心は祖国の勝利とともに高鳴ることはできなかった。

そうして第三に、再び彼の私生活にその原因が求められる。一八〇六年、久しい内縁関係を清算して、彼はクリスティアーネと正常な結婚生活に入ったが、創作家としての彼の心はクリスティアーネによってみたされることはできなかった。ひたすら地上の子であった彼女は、詩人の家を守り、その精神と肉体の憩いの場所としてふさわしくはあったが、所詮彼の詩心を飛翔させうる女性ではなかった。この頃試みられた数次にわたる彼の旅行は、かかる家庭の安息、日常生活の狭隘を脱しようとする彼の焦燥を示している。そういう態度が道徳的にいってかりにどうであろうと、愛にもえることによって人類に贈り物をすべく定められている詩人にとっていかんともしがたいことであった。

内外とも意にまかせぬこのような状態にあって、彼の精神と制作に一転機をきたすべき幸運な時節が訪れる。それは、東方の世界とその精神を代表するペルシアの詩人ハーフィズとの出会いである。

「王侯の畏敬をうけ友人の愛につつまれ、ハーフィズはシーラーズの薔薇園で研究と享受の生活をたのしみつつその生涯を送った。がその時代は東方の歴史が示す最も波瀾にとむ世紀の一つであった。互いに憎み、干戈を交える諸王朝が、滅びさった他王朝の上に立ち、再びまた滅んでいく。…その頃東方を震憾させていた恐るべき政争の嵐は、この詩人の曇りない晴朗と著しい対照をなしている。彼の周囲では国々が砕けちり、簒奪者が威嚇的な声をあげて勃興していたが、詩人は超然として、心楽しく、夜鳴鶯と薔薇を、酒と愛を歌っていた。」(7)

ハンマー＝プルクシュタルのハーフィズ訳(8)に付せられたこの序言が、ゲーテの心にどんな喜びと驚きを与えたかは想像にかたくな

い。それは彼自身の現実であり、そしてそれ以上に彼の理想とする境地でもあった。彼は「年代記録」一八一五年の章に書きしるしている。「フォン・ハンマー訳になるハーフィズの全詩集がすでに前年私の手に入っていた。以前時々雑誌に翻訳紹介されていた個々の作品からは何もうることができなかったが、今度まとまったものを読んでそれだけ一そうつよい印象を与えられた。私はそれに対して創作的な態度をとらざるをえなかった。そうでもしなければ私はその力強い現象におしつぶされそうになったからである。影響はあまりに甚大であった。ドイツ訳も手もとにあった。だからどうしても自分でもそれを作ってみないではいられなかった。凡そその題材または精神において相似する、私のなかに蓄えられてあったすべてのものが心に浮んできた。それは、内外ともに危機に瀕しているこの現実世界から、自分の欲望、能力、意志のままに楽しみつつ関与できる理想世界に逃げこむことがきわめて必要だと感じていたからなおさらである。[9]」かくして、彼の心は今や東方の世界に開かれ、そこに己れの理想境を構築しようとする。もっとも、東方に対する彼の関心はこのときにはじまるのではない。すでに幼い頃から旧新約聖書に興味をいだいていたのはいうまでもないが、やがてヘブライ語を学び、ヨーゼフを主題とする叙事詩を試みたことが、「詩と真実」の第四章に詳細に語られている（一七六〇年―六三年）。一七七一年から翌年にかけて「コラーン」が熱心に研究される（一七七三年、マーホメット戯曲化の試み）。それに伴う「マーホメットの歌」の制作。一七七五年、ヘルダーのうながしによる旧約雅歌の翻訳。イタリア旅行からかえってのち、一七九一年カーリダーサの「シャクンタラー」によせた深い関心（この作品が、「ファウスト」の「舞台の前曲」の構成に影響していることはあまねく知られている）。一七九八年の旧約モーゼ五書の研究。一八〇八年の「曠野におけるイスラエル族」の研究（これは後に手を加えて「西東詩集」の「註解と論説」のなかにおさめられた）。同年、ジャーミーの恋愛小説「メジュヌーンとライラ」に対する関心。――主だった事柄をあげても以上のような久しい準備期間があったのであるが、そこにはまた当時隆盛となったロマン主義の学問や芸術がしきりに東方への興味をそそっていた事情も見のがすことができない。がゲーテのこのような長期にわたる東方への関心が、集中的な創作活動として展開されるためには、ハーフィズの詩世界による触発が必要であった。それは「西東詩集」の冒頭をかざる「遁走」に鮮かに表現されている。

Nord und West und Süd zersplittern,
Throne bersten, Reiche zittern,
Flüchte du, im reinen Osten
Patriarchenluft zu kosten,
Unter Lieben, Trinken, Singen
Soll dich Chisers Quell verjüngen.

北、西、南、くだけちり、
王座ははじけ国家は震う、

逃れゆけ汝、純なる東方にて
族長の空気を味わうべし、
愛しつ、飲みつ、歌いつつ
キーゼルの泉に若やぐべし。

ここで注意すべきは、詩人の念頭にあるペルシアの世界はハーフィズの生きた十四世紀であるから、族長時代の純朴な空気とは程遠い中世であって、一見アナクロニズムのあることは明瞭である。この点に関して、古くから、ゲーテのペルシアはファンタスマゴリーにすぎないとの批判が行なわれている。[10] しかしゲーテにとって今問題なのは、客観的な東方の歴史世界ではなく、自己の想像をはばたかせて人類の理想境を設定することであった。その根底には彼の久しい東方研究があるにしても、今ここによび出される東方の世界は、ハーフィズをも含めてゲーテの想像裡にある純なる世界なのである。同様のことは、古典主義時代におけるゲーテの古代観にもうかがえるであろう。理想像によって自らを教育しようとするものにとって、その像にまつわるさまざまな史実はとりあえず意味をもたない。たとえばブルクハルトが、ギリシア文化史の一局面にダンテの地獄図絵を見たことは、[11] 歴史学的認識としてはむろん正しいとしても、古典世界によって自己の再生を企てるゲーテにとって、それはさしあたり考慮の外であった。

さて詩人は今隊商の一員である。その心はひたすら自由（「われ楽しく遠方へ騎り行かん、わが帽の上にはただ星あるのみ」[12]）、その思いは、「かしこ、けがれなく正しき世界で、人類の始源の深みに迫り行こう」とするにある。牧人の群にまじり、隊商とともにさまよい、肩掛、コーヒー、麝香を商い、オアシスに水をくんで生気をとりもどそう。いとしき子が面沙をかかげ、竜涎香の髪がゆらぎつつ香るときは、ハーフィズよ君をしのぼう。また苦難の多い旅路では、君の歌が自分を慰めてくれるであろう。そうして、「愛しつ、飲みつ、歌いつつ、」生命の泉に若返ろうとするのである。これが、戦乱のヨーロッパにあって、己れの「静かな教養」[13]を守りぬくために彼が試みた第二の遁走の意味であり動機であった。

彼の遁走については由来賛否の声がやかましい。ある人は、ドイツが戦乱にまきこまれているのに愛と歌と酒の世界にとじこもろうとする彼のエゴイズムを非難する。また他の人はいう。ゲーテにとっては普遍な人間性が問題であって、一時の擾乱に己れの精神をかきみだされるためには、彼の視野はあまりに広く、彼の目標はあまりに高遠であった。彼の世界市民的立場からすれば、愛国心は所詮弱さからくるヘロイズムにすぎない、と。[14] しかし、これらはいずれも全面的に正しいとはいえない。人間には、それぞれの資質に応じてさまざまな生き方が許されるのである。たとえ共同社会がどんな非常の事態にあるにせよ、個人には共同体を否定する自由があくまで残されていなければならない。そういう個人の自由が、かりに現在は共同体を否定するにしても、いつかはそこにかえってくる可能性と意向を有するかぎり、その自由はどこまでも尊重されなければならない。解放戦争に際して、一方ではフィヒテ、W・フォン・フ

ンボルト、ケルナーのような人が愛国心の昂揚のために起ったが、この動きに対して終始冷淡であったゲーテは愛国心の乏しいことを非難される。が前者を肯定するために後者を否定するのは一面的な考え方にすぎまい。複雑な生命体としての共同社会においては、現在に生きるものも、未来に生きるものも、あるいはまた過去に生きるものも、それぞれに存在の意義をもち、異った意味あいで全体の発展にあずかりうるのである。ゲーテの遁走は、刻下の急務からすればたしかに全体を否定するものであった。それのみではない。彼の動機にはもとより世界を祖国とする高遠な思想があったであろう。しかし同時に、彼にとっては自己一身の存在が何にもまして貴重だったのである。そのかぎりで彼の個人主義が悪の契機をはらむことを否定しえない。しかし彼の背反は、それによってのみ大きくまた全体にかえりうるものであった。もし彼の個人主義がついにただ全体を否定するだけに終ったならば、彼の遁走は全くの悪となったであろう。が彼は、いわば全体の現在を否定してその未来にかけたのである。しかもそれは、彼自身の現在を尊重しこれを肯定することによってのみなしとげることができた。ここに、個人に許さるべき自由の、きわめて危険な、たえず動揺する限界がある。ゲーテはあえて歌っている。

Und mag die ganze Welt versinken,
Hafis, mit dir, mit dir allein
Will ich wetteifern![15]

たとえ世界が滅びようとも、
ハーフィズよ、君と、君とのみ
私は歌をきそいたいのだ。

今詩人にとっては、ハーフィズとの歌合戦が唯一の関心事であって、そのためには世界が滅びようとどうなろうと、そんなことはどうでもよいのである。ここには、傍若無人といってもよいほどの詩人のおさえがたい願望がある。かつて「地下生活者」ドストイェーフスキーは「いつもお茶をのむのにことかかぬなら、世界が滅んだってかまいはしない」[16]といったが、恐らく芸術家の天真な信念とはかくの如きものであろう。ドストイェーフスキーにとって、「美しく高遠な水晶宮」は己れのエゴティズムを貫くために一たび破砕されなければならなかった。世界は自分一人のためにあるという信念が確立してはじめて、世界的作家ドストイェーフスキーが誕生する。同じように、今ゲーテの心をしめるのはひたすらハーフィズとの歌合戦である。あるいは彼とともに愛し、飲むことである。しかし、ゲーテにはまた、

Wo ich mir die Welt beseit'ge,
Um die Welt an mich zu ziehen[17]

世を我にひきよせんため

我世をばしりぞくる

という澄みきった孤高の境地があった。このような、エゴと全体性とが微妙に交錯する緊張関係のなかに、彼の生涯と思索がささげられていたといってもよいであろう。[18] 天才の特権という耳なれた言葉は、こういう危険な天才の賭けに対して、呆然として見守るほかない世の人の期待と危惧の気持を示すものであろう。

ゲーテの東方への遁走、しかしそれは現実には、彼が若い日をすごした故郷への還帰として現れる。一八一四年から一五年にかけての二度にわたるライン、マイン、ネカーへの旅がそれであった。神秘な東方への空想の旅は、彼の故郷の風物によって具体的な内容をえる。まずこの点において、この詩集は「西東」といわれるにふさわしい。ゲーテの心は、ハーフィズの詩と懐しい青春の日の思い出によって、早くも若返りの徴候を示しはじめる。

So sollst du, muntrer Greis,
Dich nicht betrüben !
Sind gleich die Haare weiss,
Doch wirst du lieben.[19]

されば汝、快活なる翁よ、
うれうるなかれ、
髪はよし白くとも、
さあれ汝は恋せん。

七月二十五日のこの詩につづいて、三十一日には „Stirb und werde!“（死して成れ）を歌う „Selige Sehnsucht“「至福なる憧憬」が生まれる。それは、己れの生命の若返りを自覚するとともに、大死一番、そこに一身を投げかけようとする決意の表明に他ならない。こうして、西と東の詩心は見事にとけあい、独自の美しさをもった詩がつぎつぎに生みだされていく。だが、彼はハーフィズとともに愛と酒を歌いはしたが、もし彼にもう一つの決定的な体験が与えられなかったならば、たとえそれらがいかに美しかろうとも、この詩集は一つの学識的な空想の遊戯に終っていたであろう。彼はすでに愛するものを歌い、エーロスを讃えていた。しかしその愛にはまだはっきりした対象がない。コルフの言葉をかりれば、彼は eine starke innere Liebesbereitschaft[20]（強い内面的な恋愛準備完了）の状態にあった。そうしてこれにこたえるように彼の前に現れたのがマリアンネ・ヴィレマーであった。マリアンネとの愛の交渉とその詩的開花によって、ゲーテの若返りはなしとげられ、西と東とにまたがる彼の新たな創造のいとなみは完成する。この意味で、彼らの愛を核心とする「ズライカ書」が「西東詩集」の頂点とされるのはむろん正当である。

ここで我々は、ゲーテとマリアンネの交渉の推移をあらましたどっておかなければならない。マリアンネ・ユングは一七八四年、オーストリー、リンツの生まれであるが、一七九八年以来フランクフルトのバレー劇場で踊り子をやっていた。彼女の可憐で軽快な動作

は非常な人気を博したらしく、たとえばロマン派の詩人クレーメンス・ブレンターノは彼女の熱烈な崇拝者であった。この頃、フランクフルトの銀行家ヤーコプ・ヴィレマー（一七六〇―一八三八年）は、二度の結婚にいずれも妻に先だたれ、六人の子と共に独身の生活をしていた。彼は演劇に強い興味をもっていたが、たまたまマリアンネに目をとめ、彼女を養女として自家にいれた。一八〇〇年、ヴィレマーが四十歳、マリアンネが十六歳のときのことである。ゲーテの第一回のライン旅行は一八一四年であるが、この頃彼らの間には内縁関係があったであろうとピューリツは推定している。[21] ゲーテの家は以前からこのヴィレマーと親しかったが、今度の旅行でもゲーテはヴィレマーを訪ね、八月四日はじめてマリアンネに会い、その後たびたび彼女を見る機会があった。九月二十七日ヴィレマーはマリアンネと結婚する。十月十二日マリアンネは人妻としてゲーテに会う。十八日はライプチヒ会戦の勝利を祝う祭日であったが、この時ゲーテが彼女とともにすごした幸福な数時間において、彼女の生得の快活な機智、しかも優雅で謙譲な態度は、ゲーテの心に深い感銘を与えたらしい。結婚早々のこの時のマリアンネの行動と、それを当然知っていた夫ヴィレマーの態度とはむろん問題を残す。それは「ズライカ書」の内容にもかかわることであって、後にふれることにする。十月二十日ゲーテはフランクフルトを去ってヴァイマルにかえった。翌一八一五年五月二十四日、彼をして再びライン旅行にむかわせた動機の少なからぬものは、マリアンネに対する並並ならぬ関心であったであろう。かかるゲーテの期待にはずむ心をあかしするように、この日二つの詩が生まれる。„Dass Suleika von Jussuph entzückt war“（ズライカがヨセフに心奪われしは）と„Da du nun Suleika heissest“（汝ズライカとよばるるゆえに）とである。今詩人は、一年前の美しい思い出を呼び起しながら、マリアンネをズライカとし自らはハーテムとして、ここに相聞の「ドゥオドラマ」[22]を展開しようとするのである。九月十二日、マリアンネに直接あてた最初の詩が生まれる。„Nicht Gelegenheit macht Diebe“（機会が盗人をつくるにあらず）がそれである。それにこたえて、ゲーテにあてたマリアンネの最初の詩„Hochbeglückt in deiner Liebe“（汝が愛にいたくうれしく）が書かれる。[23] ゲーテにとって思いがけないことに、彼の構想したドゥオドラマは彼ら自身の現実の相聞歌として歌いつがれていくのであった。九月二十日ゲーテはハイデルベルクにあったが、それを追うようにマリアンネは彼を訪ねる。二十三日、その途上になったマリアンネの作„Was bedeutet diese Bewegung?“（何を示すやこのそよぎ）と、それにこたえて再会の驚きと喜びを歌ったゲーテの„Wiederfinden“（再会）とは、「西東詩集」全篇の頂点をなす。九月二十六日、ゲーテは彼女を再び訪ねることを約して別れたが、しかし彼はその約束を果さず、以後二人は終生相会うことがなかった。同日、帰りの車中で作られたマリアンネの西風によせる歌„Ach um deine feuchten Schwingen“（ああ西風よ、しめりたる汝が翼こそ）は、先の東風によせる歌とともに彼女の絶唱である。ゲーテは動揺する心をおさえてヴァイマルにかえる。マリアンネは愛するものの破約に打ちのめ

され沈黙のうちに痛苦をしのぶ。たまたま翌一六六年七月六日、妻クリスティアーネの死とともに、ゲーテの心は再びかきみだされる。七月二十日、彼はもう一度ライン旅行への車にのるが、その車の顛覆したのを運命の指示と考え、この旅行は実現せずにおわった。諦念、そして詩による自己救済、これが今また彼の試みた処世のわざであった。しかしマリアンネとの間には、彼の死ぬ年まで親しい文通が続けられる。マリアンネは、望みなき再会になおも期待をよせつつあの「美しくも哀しかりし日々」[24]を終生の生けるしるしとして一八六〇年まで生きた。一八五六年、ゲーテの死後二十四年をへて、彼女はヘルマン・グリムにあてた書簡[25]のなかで、「西東詩集」のズライカとは自分であること、そこに収められたいくつかの詩は自分の作であることを告白したが、これが後の「西東詩集」研究の重大な手がかりになったことはすでに一般に知られるところである。

二、「ズライカ書」解釈上の諸問題

我々は前章において、「西東詩集」成立にいたる事情と、その最も重要な部分である「ズライカ書」の背景をなすゲーテとマリアンネの交渉過程を概観した。「ズライカ書」で相聞の歌をかわすハーテムとズライカの背後にゲーテとマリアンネがあることはあらためていうまでもないが、しかしこの書の東方的装いのなかに、ゲーテとマリアンネの体験をどこまで読みこむべきか、もしくは、東方と西方との微妙な交響諧和をどのように解きほぐすべきか、これはまた別個の問題として、この書の解釈の上に種々の難点を生ぜしめる。ゲーテとマリアンネとの愛の経過は、恋愛の予感から出会いをへて実現に高まり、やがて別離と諦念の結末に達する。そこには一つの完全な恋の物語を見る趣きさえあるのであって、この時期の彼らの詩をその成立の順序で追っていけば、彼らの感情の起伏をあきらかに読みとることができる。しかるに、現在我々がもっている「ズライカ書」の構成においては、作者は作品の成立順序を故意に無視し、自己の体験を直接読者にぶつけることを避けている。ここからして作品解釈の上に種々異る観点が生じ、研究者の間にもおのずから見解がわかれてくる。

我々が「ズライカ書」を考察するにあたって第一に注意すべきは、ここに収められた恋愛詩は必ずしもゲーテとマリアンネとの恋愛を契機とするものではないことである。第二に、彼らの恋愛に発する幾つかの詩が他の「書」に移され、あるいは「西東詩集」そのものからはずされて遺稿にとどめられていることである。[26]第三に、彼らの交渉と関係なしに生まれた詩がこの「書」に編みこまれることによって、それが別個の意味とニュアンスを帯びてくることである。「ズライカ書」の冒頭をかざる „Einladung“（招待）が早くもこのような問題を提起している。

Musst nicht vor dem Tage fliehen :
Denn der Tag, den du ereilest,
Ist nicht besser als der heut'ge ;

Aber wenn du froh verweilest,
Wo ich mir die Welt beseit'ge,
Um die Welt an mich zu ziehen,
Bist du gleich mit mir zeborgen :
Heut' ist heute, morgen morgen,
Und was folgt und was vergangen,
Reisst nicht hin und bleibt nicht hangen.
Bleibe du, mein Allerliebstes ;
Denn du bringst es und du gibst es.

この日をば逃がるるなかれ
追いつかん日とて今日より、
まさりたることのなければ。
世をわれにひきよせんため
われ世をば拒くるところ、
喜びて汝がとどまらば、
汝われと共に安けくあらん。
今日は今日、明日は明日なり。
来らんものはただ来らしめよ。
過ぎしものまた過ぎてゆかせよ。
とどまれよかしわが愛しきものよ。
汝こそはそを与うるが故。

一篇の意味は、過去に拘泥することなくまた未来を思いわずらわず、今この瞬間の現実を肯定せよというのであって、瞬間の相の下に (sub specie momenti)[27] 決然と生きることによって永遠の意味をとらえようとする、あのファウストが最後にたどりついた思想につらなるものである。がこの詩の面白さは、そういう教説めいたところにはなく、その教説を巧みに援用しながら、今愛するものと共にある美しき瞬間にもろともに身を投げかけようとする、その転調の鮮かさにある。ところで問題は、最後の二行、

とどまれよかしわが愛しきものよ、
汝こそはそを与うるが故。

である。「そを与うる」の「そ」(es) は、従来「愛しきもの」をうけるとされている。[28] 愛しきものよ、とどまれ、汝こそはその愛しきものを与えてくれるのだから、と解するのである。しかし、愛しきものが自分のもとにとどまるならば愛しきものが自分に与えられることはあまりに当然である。それは不自然である以上に間がぬけすぎて表現になっていない。「そ」は、詩人が先に述べたところの、永遠につらなる今の瞬間を安んじて享受しうる境地をさすものと解すべきであろう。ところで、ここに呼びかけられた「愛しきもの」は誰をさすのであろうか。ブールダハはいう。「この詩が『ズライカ書』の序詞たらしめられてからは、これは正に恋人を、つまりズライカ＝マリアンネを示すと解されるようになった。しかし、一八一四年の暮には、マリアンネに対するゲーテの関係はまだこのよう

な詩的表現を見出しうるにいたっていない。さればといって他の誰かを考えることもできない。恐らくここでは、ただ想像上の恋人、愛の典型、愛のゲーニウス、エーロスを体現するものが呼びかけられているのであろう。[29]」またリヒターはいう。「十一行と十二行が誰に向っていわれているかははっきりしないと思われる。多分想像上の恋人をさすにすぎないであろう。しかしまた、カール・アウグストをさすかもしれない…この詩がここに入れられてからは、それはマリアンネに関係づけられることによってはっきりした意味をえた。[30]」がこれに対してコルフはいう。「…これがはじめからマリアンネに関係しているということはありえない…ここで呼びかけられた『愛しきもの』は恐らくクリスティアーネであろう。この小さな—『ズライカ書』への『招待』としては殆ど不可解な—詩は、ゲーテの妻への新年を祝う詩に他ならない。[31]」コルフは言葉をつづけて、注意深い読者がこの箇処でぶつかるあらゆる謎は、クリスティアーネに関係づけることによって解かれる、自分自身、「西東詩集」通であるテーオドール・フリードリヒ教授の指摘によってそれを知りえた、という。そしてコルフは、彼が信じるところの、「西東詩集」恋愛詩の唯一正当な芸術的構成として、これらを時代順に配列した際に、この詩を除外しているのである。しかるにまたボイトラーは、このような成立事情を論外にして、「ズライカ書」におかれたこの詩の位置からして、「愛しきもの」はズライカをさすという。[32]

「わが愛しきもの」をもっぱらズライカとすべきか、あるいはマリアンネ＝ズライカとすべきか、しかもその背景に、想像上の恋人、愛の典型、あるいはクリスティアーネを考えるべきか、更にこの詩そのものを「西東詩集」の恋愛詩から除去すべきか、この読み方の相違はかなり大きいといわなければならない。もちろん、この詩そのものを「ズライカ書」のなかで理解することはさして困難ではないようにも思われる。「ズライカ書」はハーテムとズライカの相聞の歌を核心としている。それならば、この書への招待として置かれた詩で「愛しきもの」と呼びかけられるのはズライカ以外にはありえない。たとえ成立事情がどのようなものであったにせよ、ひとたびその詩が「ズライカ書」のなかに置かれるならば、それは詩人の体験をはなれて一人歩きをはじめる。そこにはもう問題はないように思われる。がしかしそう簡単ではないのである。ゲーテは、自ら「西東詩集のよりよき理解のための註解と論説」(Noten und Abhandlungen zu besserem Verständnis des west-östlichen Divans)を書いているが、ゲーテ研究者たちもまた、この詩集のあらゆる面にわたって註解と論説を試みてきた。我々がたとえば「ファウスト」を註解なしで読むのを不完全であるというのと同じように、「西東詩集」もまた、ゲーテ及びゲーテ研究者によってなされた註解を無視してこれに立向うわけにはいかない。「ズライカ書」においてゲーテはその背後の事情をかくすことを意図したにかかわらず、それぞれの詩は研究の進むにつれてゲーテの意図とは別の意味で一人歩きをはじめたのである。こうして、それぞれの詩は背後の事情が加わることによって一そうのニュアンスを加えてくる。しかもそれのみではない。後に述べるように、「西東詩集」の主要な魅力は、

アラベスク模様の多彩さにあるが、作者は、アラベスクによって自己の体験をかくすと見せて実はその網の目から体験をのぞかせることをねらっているばあいがある（たとえばすぐつぎにあげる詩を参照）。読者の喜びの少なからぬ部分もまたこの戯れに加わることにある。かくして、この詩集を残りなく味わうためには、背後の事情を知った上で再び詩集に立戻ることが要求されるのであるが、この背景をどこまでそれぞれの詩に読みこむかが解釈の上の問題となる。先にあげた各研究者の見解の相違は、この読みこみの度合のちがいによるのであり、ひいてはこの作品全体を見通す視点の相違に帰著するのである。

が問題はそれだけにとどまらない。上の詩においては、我々は註解なしにでも一まずその意味を理解することができる。しかし別の詩においては、それ自身が示す断層のゆえにその背後にさかのぼることが要求されるのである。"Hatem" と題する一詩をあげよう。

Locken, haltet mich gefangen
In dem Kreise des Gesichts !
Euch geliebten braunen Schlangen
Zu erwidern hab' ich nichts.

Nur dies Herz, es ist von Dauer,
Schwillt in jugendlichstem Flor ;
Unter Schnee und Nebelschauer
Rast ein Ätna dir hervor.

Du beschämst wie Morgenröte
Jener Gipfel ernste Wand,
Und noch einmal fühlet Hatem
Frühlingshauch und Sommerbrand.

Schenke her ! Noch eine Flasche !
Diesen Becher bring' ich ihr !
Findet sie ein Häufchen Asche,
Sagt sie : „Der verbrannte mir."

巻き髪よ我をはなすな
汝が美しき面わのうちに。
汝が褐いろの蛇なす髪に
応うべきもののなけれど。

されどこの心かわらず、
うら若き花とふくらむ。
雪、霧雨の下にありとも
エトナのごと汝に燃えなん。

曙光に赤むその絶壁のごと

汝が姿われを恥じしむ、
かくてハーテムまた感ず、
春の息吹と夏の烈火を。

酌人よもち来れなおひと壜。
この盞をかれにささげん。
かれ一塊の灰見いださば
かれいわん「こは我に燃えぬ」と。

若く美しい恋人を思うとき、詩人の心は幸福感にふるえるが、しかも同時に老いたるわが身を悲しまずにいられない。が彼はあえていう。ただこの心だけは変ることがない。すでに白髪のわが身ではあるが、雪をいただくエトナの山のように君のため火をはくであろう、と。すでに多くの註釈家の指摘するように、第三聯一行目のMorgenröte が三行目の Hatem と韻のあわないことから、Hatem の背後に Goethe を読むべきことはもちろんであって、ここで我々は、ゲーテ＝マリアンネの体験にかけられた巧みなヴェールの面白さを味わうべきである。それは体験をつつみかくすと見せながら、逆にその方へ読者の注意をひきよせることをねらうのである。

がここでの我々の本来の問題は、前三聯と最後の聯との間に転調もしくは断層が認められることである。我々はこの第四聯が後にゲーテによって書き加えられたものであることを知っている。しかしそれは、たとえばリヒターがいうように、「すでにそれ自体全体の気分を破壊する」[33]にすぎないものであろうか。我々はそこに作者の特別な意図を認め、しかもそれが見事に成功していると考えるべきではあるまいか。マリアンネによせるゲーテの詩は、その成立の当初から真率と遊戯の間をさまよう趣きをもっているが、しかもそれが彼の愛情の真実の告白であることには変りがない。が彼は後に「ズライカ書」のなかにこれらの詩を採用するにあたって、「西東詩集」全体に通じるシュピールの性格をこの「書」にも強く与えようとする。直接な愛の告白ではなく、体験からの距離を主張しようとする。愛はマリアンネへのそれではなく、一般的な愛の歓喜と悲傷とならなければならない。かくして、第四聯の転調は、後に書き足されたための時代のずれを示すのではなく、前半のはげしい調子をやわらげ、主題をイロニジーレンするための必要な操作と見ることができよう。もとより、我々は作品をあくまで独立した生命体としてあつかうべきであって、いたずらな註釈によってその生命をこぼつべきではない。しかし作品自体がある断層をのぞかせるとき、それを看過するのは作品を正当に理解する所以ではない。[34]むしろ作品自体のもつ構造が、それを成立させた背後の事情へ研究者をさそいこむのである。この詩の解釈においてどのような立場をとるにせよ、我々はすでに知られている事実を一旦は通りぬけることによって、あらためて詩に対することが要求されるのである。

が我々の注意を伝記的事実にひきよせるもう一つの場合がある。たとえば、「ズライカ」と題する„Was bedeutet diese Bewegung?"（何を示すやこのそよぎ）の歌は、作品自体が断層や亀裂を示すの

ではない。しかし先にもふれたように、我々はこれがマリアンネの作であることを知っている。そうして彼女の原詩とくらべると、その第四聯がゲーテによって重大な変更を加えられていることに気がつく。この方向をさらにおし進めると、たとえばコルフのように、ゲーテの改作ではなくマリアンネの原詩をもって「西東詩集」の本文たらしめようという考え方さえも現れてくる。[35] これもまた、「ズライカ書」に対する研究者の視点の相違にもとずく問題であるが、こうなると、我々は否応なしに両詩を比較し、更にその背景をも顧慮しつつ、自己の視点を見さだめることが必要となってくるのである。(この詩については第三章で詳しくのべることにしよう。)

さて以上の数例に見られるように、「ズライカ書」の各詩の解釈はさまざまの問題を残している。ここからして、「ズライカ書」はいかなる視点から読まるべきかという、別個の、より根本的な問題が押し出されてくる。

第一の読み方は、ゲーテがこの「書」のために読者に望んだやり方である。つまり、彼がこの「書」を編集したそのままの形で読むことである。それはほぼつぎのような結構をもつであろう。この「書」の冒頭には「招待」の言葉がある。それは、詩人による恋人への呼びかけであるとともに、読者をも彼らの愛の世界に招きよせるような響きをもつ。ついでズライカとハーテムという命名が二人の間に行なわれ、以後全巻は二人の相聞を中心にしてドゥオドラマーティシュに展開される。どの詩も熱烈な愛の歌であるが、しかしこれらが以前のゲーテの抒情詩と異るのは、かつては作者の感動が端的に歌われたのに対して、ここではすべてが意識によって制御され、たとえ別離の悲愁を歌う場合でも、フモールとシュピールの味わいが一貫して見られることである。ハーテムはすでに白髪をいただく詩人、ズライカは若く豊満な、機智にとむ女性である。二人の間の出会いと別離と再会、それぞれ唯一回かぎりの美しい瞬間が高らかに歌いあげられ、メロディーはそれに応じるゲーゲンメロディーを呼びだす。短調と長調の交錯するうちに、愛の期待と出会いの喜びと別離の悲哀が、鮮かに、優雅に、また機智豊かに描きだされる。しかも彼らの愛の体験は、広大な宇宙と諧和し、そこに神秘的な世界観をのぞかせるのである。全体は、「ズライカ書」と題する短い詩を境として大凡二つの部分にわけられる。第一部はほぼフランクフルトとゲルベルミューレですごした数週間のうちに生まれたもの、第二部は主としてハイデルベルクの体験にもとずく詩である。内容からいうと、前半は期待であり後半は実現であるということもできよう。そうして全巻は„In tausend Formen magst du dich verstecken“(汝千の形にかくれんとも)という、ガゼール形式による恋人のアポテオーゼに終るのである。

このような構成に従う読み方はむろん正しいのであり、作者がこの「書」を編纂した意図は正にそのように読まれることであった。しかしなお問題は残るのである。これらの詩は、いわば[36]「アラベスク風に無選択な見方」(arabeskenhaft wahlloses Sehen)によって集成されているために、このアラベスク模様の一点一劃を理解しようとすれば、我々はただ詩の言葉だけに頼っていることはできず、

それらの詩を生みだした事情を知ることがどうしても必要となってくる。古くヴルムやデュンツァーにはじまる数多い註釈の試みはこの必要に応じてなされたものである。それはやがてブールダハの驚くべく行きとどいた文献学的研究によって一応の完成をみる。[37]がこのような研究によって明らかになったのは、「ズライカ書」の核心をなすハーテムとズライカのリーベスロマーンはゲーテとマリアンネの愛の交渉から生まれたものであるが、それらの詩は成立の順序を故意に狂わせ、他の「書」のなかに入れられることもある一方、彼らの体験にかかわりのない詩もこの「書」に編みこまれていることである。だから、我々がそれらの詩を「ズライカ書」のなかで読もうとする場合にも、多かれ少なかれ、現在置かれているその詩の位置からはずし、互いに関連するものを比較考察することが当然要求される。「ズライカ書」の理解にあたってはこのような読み方が従来行なわれてきたのである。しかしこれは更に一歩を進めて、「ズライカ書」を全く新しい立場から読みなおそうという態度をも生みだしてくる。即ち「ズライカ書」のなかで直接ゲーテとマリアンネに関係のある詩を取りだし、更に他の「書」におかれているものを取りいれ、それらを成立の順序に並べ、専らゲーテとマリアンネの体験の告白としてこれらの詩をとらえようとするのである。ブールダハは、すでに一八九六年に発表した論文「西東詩集の伝記的時代史的考察」において、ゲーテとマリアンネの関係を「悲劇的なもの」として述べているが、[38]ここには早くも右にいった観点に立つことをうながすようなものがある。一九一五年、マックス・ヘッカーが彼らの往復書簡を編集発表し、[39]更に一九四一年、ハンス・ピューリツが「ゲーテとマリアンネ・フォン・ヴィレマー」[40]において、彼らの交渉経過をあますところなく究明する。そうして、このような準備作業ののち、「ズライカ書」をゲーテとマリアンネの悲劇的リーベスロマーンとして読むことがこの「書」の唯一の正当な読み方であると主張したのはH・A・コルフであった。彼はいう。ゲーテがこれらの詩を「ズライカ書」の形で編集したのは「芸術的な理由ではなく、人間的な、非芸術的な理由」によるのであった。それは「何よりもマリアンネに対するいたわり」が、そしてまた自己自身に対する顧慮がそうさせたのである。彼は「ズライカ書」にひそむ個人的な体験を一般大衆に知られまいとした。それはどこまでも謎でなければならなかった。だが、マリアンネ自身がやがてこの「書」のヴェールをはずした。その後のゲーテ研究は、この「書」の伝記的背景を明らかにすべくうむことがなかった。だから「ズライカ書」の人間的悲劇をおおいかくすべき理由はもうなくなったのである。従ってまた、ゲーテがこれらの詩を編集した本来の意味は失われたのである。そこで問題はこうなる。「今や『西東詩集』の恋愛詩に、その真の理念に最もふさわしい構成形式を与えることが逆に要求されているのではないか。つまり、これらの詩を配列するに当って、純粋に芸術的な観点から処置すべきではないか。[41]」

だが、コルフが主張するこのような読み方が「ズライカ書」の真に正しい芸術的な読み方なのであろうか。コルフが「確信するところによれば、『ズライカ書』という偉大な芸術作品はこれによって

はじめて完全な働きをなすにいたる」[42]というが、果してそうであろうか。ゲーテが「西東詩集」を編纂したとき、彼の心はもう遠く情熱の時期をはなれていた。その詩にはなお一語一語彼の血が通ってはいる。しかし彼は今それを直接読者の前にさらすことを望まない。この詩集全体が高いシュピールの精神で貫かれているように、その中心をなす「ズライカ書」もまた当然その精神で支えられなければならない。それは、ゲーテがこの詩集の「よりよき理解のために」そえた「註解」の言葉が何よりも明らかにするであろう。彼は「西東詩集」を未完のものと考え、その完成のために「将来のディーヴァン」という一章を書いた。ところで「ズライカ書」については、「その全体に流れている情熱の息吹と精神とは、葡萄酒の豊年の回帰と同じように容易に再びかえってくるものではない」といって、この「書」に特別な意味を認めているが、しかもこの「書」だけは完結したものと見てほしいという。[43]ここに現れる西方の詩人は「自足せる回教修道僧」であって、「現世の富と価値を認めず」この決心からして彼は「最も不安のない快適」を享受する。この態度は恋人に対しても同じである。「自己の老齢と白髪とを彼はズライカへの愛で飾る。がそれは伊達者の押しの強さによってではなく、彼女もまた自分を愛しているという確信をもってである。[44]」「ズライカ書」に付したゲーテのこの冷静な覚え書は、彼がこの「書」に対しても「高きにあって統べるもの」[45]の態度をもってのぞんでいることを示すのであり、しかもそのような立場から「ズライカ書」を「完結したもの」(abgeschlossen)と考えているのである。コルフの確信によれば、「西東詩集」が世に現れてから百年をへて、もしゲーテがそのなかの恋愛詩をきりはなして出版しようと考えたなら、必ずコルフのようにしたであろうという。[46]ゲーテが百年後何をするかを想像するのはコルフの自由である。だが、ゲーテが「西東詩集」編集に際して、これだけは「完結した」といっている「ズライカ書」は、あくまで我々のよるべき唯一のテクストでなければならない。我々がこの「書」を読みながら自ずとその伝記的背景にさそいよせられるのを、方法的に一貫して最後まで行きつくしたのはたしかにコルフの功績といってよい。がそれは「ズライカ書」の唯一正当な芸術的読み方なのではない。我々はこれらの詩の一語一語にひめられた背景の意味を念頭におき、もう一度「ズライカ書」にかえってそのアラベスク模様の多彩なニュアンスを楽しむべきなのである。コルフのように、この「書」を解体して新たにそこにゲーテとマリアンネのリーベスロマーンを構成することは、それ自体興味ある試みであるが、しかしそれは「ズライカ書」を読む正当な視点ではない。彼らのリーベスロマーンはあくまでも「ズライカ書」の背景であって、それを主題の位置に押し出すことは、「ズライカ書」を支えるシュピールの性格を失わせるとともに、「西東詩集」全体の構成をも破壊することになるであろう。ゲーテがこれらの詩を編集した本来の意味は「失われた」どころか、「西東詩集」がその存在意義を失わぬかぎり依然として存立しているべきものなのである。我々は七十歳に近い老大家コルフが、晩年のゲーテのエローティシュな体験によせた若々しい考察に驚嘆と敬意をおしまない。し

かし彼が主張する「芸術的な」立場は、「ズライカ書」を理解する正当な立場ではない。それは一たび行きつくさるべき道程ではあった。しかし目的はさらにそれを超えたところに、あるいはひるがえって最初の出発点に求められなければならないのである。

三、インタープレタツィオーンの試み

我々は以上において、「ズライカ書」が成立するにいたる事情を検討し、そこからしてこの「書」を解釈すべき視点について論じた。「ズライカ書」はあくまでゲーテが読まれることを期待したそのままの形で読まれてよいのである。もとより、その揺動する色彩の多様、明暗の無限の変化は、それぞれ微妙な背景をもち、我々はそこにさかのぼることなしには詩集そのものの意味を汲みつくすことができない。が背景はあくまでも背景であって、それが作品解釈の主題となってはならないのである。「ズライカ書」を一貫するゲーテの形式意志は、「西東詩集」の他の書におけると同様、「多彩を喜ぶ心」(Farbenfreudigkeit)[47]である。かかる態度は、対象に対してフモリスティシュに距離をとることによってのみ維持される。それは、グンドルフの巧妙な表現をかりるならば、いかなる対象いかなる瞬間に対してもゆとりをもって、「おじさんのように親しげに肩をぽんと叩いてやる態度」(onkelhaftes Schulterklopfen)[48]なのである。我々が「ズライカ書」を享受する場合にも、ゲーテのこの意志と態度に順応し、それに我々の眼鏡の度をあわせていくことが要求されるのである。

さて我々は以上の立場にたって、「ズライカ書」の二三の詩について「インタープレタツィオーン」を試みてみよう。取りあげる対象は、ゲーテとマリアンネの交渉が危機の様相を最も鋭く示した時に成立した詩に集中される。けだしそれらは、「ズライカ書」のなかで最もすぐれた詩であるとともに、ちょうどそこにおいて研究者の解釈がわかれるところだからである。ここに「インタープレタツィオーン」という言葉を用いる時、我々は直ちにE・シュタイガーを念頭にうかべる。彼の方法論がわが国に導入されて以来、それは学界において殆どジャーナリスティックな話題となって現在に及んでいる。彼の立場は、文献学的、社会学的、精神史的等々あらゆる文芸の研究法と区別して、文芸の文芸学的考察を強調することにある。[49]それはたしかに従来の文芸研究の盲点をついた鋭い批判であり、何よりも彼の繊細鋭敏な実践的業績がその方法の実りある所以を証明している。しかしそれはもとよりこれまで行なわれた様々の研究法を無にするものではない。むしろこれまでの諸方法は、シュタイガーのいう「解釈」を当然の前提としているのである。のみならず、我々は当面の「ズライカ書」の解釈にあたって、たとえば文献学者ブールダハにおいてすぐれた「解釈」に接する。また、我々が別の角度から批判を加えた精神史家コルフにおいても卓抜な「解釈」を発見する。シュタイガーの提起した問題は、従来の様々な方法を、またそれを実践した研究者を排除する方向に働くべきではなく、かえってそれらの方法に前提されていたものを意識的にとりあげ、ブールダハやコルフの如きすぐれた研究者が「解釈」者として

も卓越している点をあらためて認識させるにあるということもできるであろう。我々は以下において、シュタイガーの方法を意識しながら、「ズライカ書」の解釈を試みる。しかし結果においてはむしろシュタイガーに反対し、かえって古きブールダハやコルフの見解にかえらざるをえない場合があった。それは、流行する学説の背後に忘れ去られようとする古き学的成果の落穂拾いにすぎぬ仕事であったかもしれない。しかし拾われた落穂は、少くとも我々にとっては、シュタイガーが唱導する解釈の立場からしても貴重な意味をもっているのである。

Suleika

Hochbeglückt in deiner Liebe
Schelt' ich nicht Gelegenheit;
Ward sie auch an dir zum Diebe,
Wie mich solch ein Raub erfreut!

Und wozu denn auch berauben?
Gib dich mir aus freier Wahl;
Gar zu gerne möcht' ich glauben -
Ja, ich bin's, die dich bestahl.

Was so willig du gegeben,
Bringt dir herrlichen Gewinn;
Meine Ruh, mein reiches Leben
Geb' ich freudig, nimm es hin!

Scherze nicht! Nichts von Verarmen!
Macht uns nicht die Liebe reich?
Halt' ich dich in meinen Armen,
Jedem Glück ist meines gleich.

汝が愛にいたくうれしく
我は機会をののしらず。
そは汝を盗みたりとも、
かかる盗みのいかにうれしき。

また何とて盗みをやいう。
進みて汝を我に与えよ。
いなとよ敢て我いわん、
盗みをせしは我なりと。

汝喜びて与えしものは
汝をこそ富ますなれ。
わが安らいと豊けき命
進みて与えん、そをうけよ。

貧しなどとなたわむれそ。
愛は我らを富ますならずや。
わが腕に汝をだくとき
わが幸にまさる幸なし。

一八一五年九月十二日、ゲーテははじめてマリアンネに一つの詩をよせた。

Nicht Gelegenheit macht Diebe,
Sie ist selbst der grösste Dieb;
Denn sie stahl den Rest der Liebe,
Die mir noch im Herzen blieb.

機会が盗人を作るにあらず、
機会こそは最大の盗人なれ、
そはわが心に残りたる
最後の愛を盗みたれば。

ドイツの諺に「機会が盗人を作る—盗みは出来心」(Gelegenheit macht Diebe) というのがある。詩人は今自分の心がマリアンネに傾いたのを、この諺をかりて諧謔的に告白する。こえて十六日、マリアンネがそれにこたえたのが先の詩である。ゲーテは若い頃から、愛する女性たちに数多くの詩をささげた。ケートヘン、リゼッテ、フレンツヘン、フリデリーケ、リリー、シュタイン夫人等々。彼女らはみなこれを感謝と誇りをもってうけとった。しかし彼女らが自ら詩をもってこれにこたえることはなかった。今や相手の女性は、ゲーテのさそいに呼応するように詩の形でこたえるのである。これは、ゲーテの久しい詩作体験において未曾有のことであった。しかも、「わが心に残りたる最後の愛」という言葉において、老いたるわが身をかえりみるようなゲーテの調子に対して、マリアンネは朗らかな歓呼をもって自己の幸福感を歌いかえしてやるのである。ゲーテは、ハーフィズの詩「汝わが心を盗みぬ」を念頭においてこの詩を書いた。しかし、愛の交渉において「盗む」とか、盗まれたために「貧しくなる」とかいうことは本来ありうることではない。だからマリアンネは、この言葉をとらえて真向から切りかえしていく。「わが安らいと豊けき命/進みて与えん、そをうけよ。」しかもすでに知られているように、「わが豊けき命」„mein reiches Leben“はマリアンネの原詩では「わが命のすべて」„mein ganzes Leben“であった。これはきわめて大きな相違といわなくてはならない。幼い頃からゲーテの詩に親しみ、彼に対して絶大な畏敬の念をいだいていたマリアンネ[69]は、詩人の愛情に対してひたむきな愛をもってこたえはしたが、しかし彼女はどこまでも控えめな態度を失わなかった。このようなマリアンネが、たとえ詩の上にもせよ、今愛する男に身をなげかけようとして自らを「豊けき命」ということはありえない。がこれがゲーテによって「豊けき」と書きかえられることによって、ここに歌われる恋はたわむれの性格を強め、女性

はコケッテリーの気味をおびてくる。この書きかえがゲーテの意図によるものか、あるいは彼の記憶のあやまりによるものかは明らかでないが、少くとも、体験のエルンストから距離をとり、かつ西・東の趣向を生かすためには、「豊けき命」とする方が面白いであろう。コルフはむろん「わが命のすべて」をテクストとして採用するが[51]、しかし我々はコルフの見解を重視しつつもやはり「豊けき命」にかえらなければならないであろう。

詩の意味は以上でつきているように思われる。しかし我々はさらに、この詩の先頭におかれた „Hochbeglückt“「いたくうれし」という、高く強く響きわたるような一語に心をひかれる。殊にそれが、命のすべてをささげようとしたマリアンネの、ゲーテによせた最初の詩語であることを知るとき一そう関心をそそられる。それは愛の幸福感の高まりとともに、その愛の精神的な高さに対する誇らかな自覚をも現しているであろう。このような「高い」幸福感が全詩のはずみかえるような強い調べを打ちだしてくるのである。揚抑のトロヘーウスの韻律が、力強くまた軽快な全体の流れを効果的に支える。「貧しなどとなたわむれそ。愛は我らを富ますならずや」は、ゲーテの言葉を打ちかえす機智としても面白く、またその効果をねらっているが、しかしその背後に、彼女の高い幸福感にさそい出された真率な告白の響きが感じられる。そうして、「わが幸にまさる幸なし」という結びの言葉が、きっちりと小気味よく全体をしめくくる。我々がこの詩をマリアンネにひきつけて考えてみるとき、我我は更に彼女の体験の深みに入っていきたい誘惑にかられる。なぜならそこは、「ズライカ書」を成立させる最も重要な契機をはらんでいるとともに、研究者の間に著しい見解の相違が見られるところだからである。

マリアンネが舞台生活をはなれてヴィレマーの養女となるにいたった経緯は先に述べた。がヴィレマーその人の性格と、彼のゲーテ、マリアンネに対する関係については従来立ちいった考察がなされていなかった。ヴィレマーはこの問題において、寛容な第三者としてあくまで傍役の位置にとどまっている。そうして彼がその理解と寛容によってゲーテ、マリアンネの詩的恋愛を成立させたのは彼の高貴な性格によるものとされている。マリアンネを危険な境遇から遠ざけたのは彼の人道主義的な動機によるものであった。ゲーテとマリアンネとの交渉が深まるに当っても、彼はいささかもとりみだすことなく、彼らの精神的な恋愛を静かに見守りこれを許していた。ブールダハはこのような意味でヴィレマーを「高貴な、まことに非凡な人物」であるという。[52] ボイトラーは、ヴィレマーが「あらゆる精神的、芸術的な事柄に対して心を打開いた情熱的な性格の人、総明で活動的な紳士、世紀のかわりめにおいて疑いもなくフランクフルトの最も有能な最も声望ある人たちの一人」という。[53] ヘッカーもまたその編纂した「往復書簡」への序文でいう。「我々は彼の無垢な心情を讃嘆する」[54]と。がこのような伝統的見方に対してピューリツは真向から反対する。ヴィレマーの性格は単に「高貴」ということで片づくのではない。マリアンネを自家にひきとったとき、その動機が「博愛と芸術愛護」[55]であったといわれるが、もし彼

がマリアンネの才能を真に惜しんでいたなら、彼女を家庭にひきこもらせるべきではなかったであろう。また、博愛の動機がこのような行為にまで及ぶときは、対象に対するそれ以上の個人的な関心を前提しなければならない。彼が役者たちをたえず身近においたのは、ジンリヒな欲求も働いているのであって、特に、評判だったマリアンネをただ芸術愛好者の目で見ていたとは考えられない。このように憶測するのをいやしいなどというのは、人生の真実にうとい道学者流の考えすぎにない。そうしてピューリツは、ヴィレマーが彼女を自家に入れるにあたっては、彼女の讃美者であり彼女もまたそれに好意をもってこたえていた詩人ブレンターノに対する嫉妬がはたらいていたという。[56] 詳細な資料を基礎にしてなされたピューリツの推測は恐らく誤ってはいないであろう。もっとも、人の行為の動機をすみずみまで掘りさげていけば、何ほどか不純なものにぶつかるのは別に珍しいことではない。たまたまヴィレマーがゲーテに関係していたためにこのようなせんさくをなされるのは、この人にとって少なからず気の毒なことといわなければならない。むしろ、このようにせんさくしていけば誰にでも当然見つかるものを重大な発見のように主張するピューリツの方がかえって道学者的な感じがしないでもない。我々はピューリツの推測にあえて異を唱えようとは思わないが、しかしそれをもふくめてヴィレマーがやはりノーブルな性格の人であったといってよいであろう。がこれらの前史は我々にとって重要ではない。問題は、その後の彼がどういう状態にあったかということである。一八〇八年十二月十一日、彼はゲーテに書簡をよせている。これは、同月五日ゲーテが彼によせた書簡への返事である。前後の事情は明らかでないが、ゲーテの文面は、ヴィレマーが自己の精神的不満を訴えたのに対する慰めと励ましの言葉と考えられる。ゲーテは、物質的な生活だけする人にくらべて、精神的な要求を自己に課するものは、どうしても自己に不満を感じ悩みもまた多いものだという。[57] ヴィレマーの書簡はそれをうけて、更に自分の立場を説明しているものと考えられる。

「…私が底なしの苦悩におちいっているとか、シメーレに悩まされているとかいうわけではありません。私が自分のものであるかぎり、私は満足ですし、自他の愚かさにわずらわされるものでもありません。けれども、私の精神の翼は断ちきられ、その力はなえ、私の健康は破壊されています。[58]」

ヴィレマーは、フランクフルトの名士として、後一八一六年にはオーストリーのフランツ一世から貴族に列せられたほどの人であるが、その内生活は失意と不満にみちたものであったらしい。書簡は続けている。

「私は教育もうけず学問もありません。貧しい家に生まれたために、フランクフルトの流儀で誰からも見返られ（これはかよわい心に深い溝をほり、生きる苦しさを身にしみて感じさせ、果てしない野心をかきたてるものです）、私は自分の持ちものをすべて自分で手に入れるほかありませんでした。そうしているうちに私の最も美しい部分は失われてしまいました。私はお金をもうける以外にどうすることもできませんでした。見せかけの名誉を求める以外には努

力の目標をもちえませんでした。」[59]

更に彼は、一族のうち十五人を失い、三年前には最愛の娘を十八の年に死なせ、今生きている一人息子とは別れてくらさなければならない、若い頃の無思慮、悲しみ、憂慮によって失われなかったわずかばかりの独創性は芝居のためにすりへらされてしまった、という。[60] これらがゲーテにあてた言葉であってみれば、彼が無教養といってもそれは客観的にもそうだということにはならない。また、生まれが貧しいといってもどの程度であったかはわからない。が我々にとって重要なのは、この四十八歳の男がどういう気持をいだいていたかということであって、我々はヴィレマーの言葉から、病める魂をいだいた孤独な男を想像することができる。書簡は続ける。

「過去はこのようなものでしたが—未来もまた愚かしい希望のために空しくなりました、—八年に及ぶ経験は私の希望が実現することはあるまいということを教えてくれました。こうして私は日ましに自分のなかに引っこもり、ますます重苦しい黙りがちな人間になっていきます。」[61]

彼が八年の経験といっているその八年前とは、ちょうどマリアンネがヴィレマー家に入った年である。ピューリツがいうように、ここでヴィレマーがいう「希望」は、マリアンネに対する彼の愛情の将来における結実以外のものをさすとは思えない。[62] が彼の深い好意にもかかわらず、明朗で才気煥発な若ざかりのマリアンネの心は、この二十四歳年長の風変りな男に対して動きようがなかった。彼らがそれにもかかわらず、十五年の同居生活ののち結婚したのは、ヴィレマーのたっての願いをしりぞけきれなかったマリアンネの立場の弱さによるであろう。ボイトラーはこの経緯について、一つの臆測として、ゲーテがマリアンネの心をとらえたと見るや、ヴィレマーはあわてて、必要な書類もととのわぬうちに式をあげてしまったのだという説をあげている。[63] それはともあれ、ヴィレマーは形の上で希望をとげはしたものの、すでに自分たちの未来の生活に対するのぞみをすてていた。彼女もまた、持ちまえの快活な性格から、それを悩むということはなかったとしても、この結婚生活が無であることを感じていたであろう。結婚早々のヴィレマーが新妻マリアンネとゲーテとの親しい交わりを傍らにいてどう見ていたか、これは「ズライカ書」をひもとくものが一まず心をひかれる問題であるが、それは従来説かれているような、彼の「高貴な」性格のみによっては説明されない。ヴィレマー夫妻の結婚にいたる経過をたどっていけば、それは全く別な光にてらされざるをえないのである。「見せかけの名誉」(Scheinehre) にとりまかれればとりまかれるほど、彼はますます自己の存在の空しさを感じないわけにいかなかった。そこでヴィレマーは、ゲーテとマリアンネの詩的恋愛に第三者として関与することによって、アプノルムな形で自己の存在の意義を恢復させようとしたのである。ピューリツがつぎのようにいっているのは、ややうがちすぎるとはいえ、従来の通り一遍の解釈よりははるかに真相に近いであろう。「ヴィレマーはこの神的な人間に最高の犠牲をささげることによって、己れの存在の空しさから救われ、自分がもがきつつ求めていた精神と偉大の世界にしゃにむに関わろ

うとしたのであった。[64]」

このような背景からマリアンネの詩にかえるとき、„Hochbeglückt“（いたくうれし）で歌いだした彼女の充実した心のときめきはその十全の意味で我々の心にひびいてくるであろう。「わが安らい、わが命のすべて、進みて与えん、そをうけよ」といい切った強い調子は、彼女の切実な、しかもまことに率直な訴えとして解されてくる。かくの如く、ズライカの歌がマリアンネその人の生活を背景とし、彼女自身の作であることを知ることによって、この歌は一そう深いニュアンスを帯びてくる。それは単に詩と体験との積み重りであるだけでなく、一が他と互いに響きあうことによって、詩自身が奥深い意味を帯びてくるのである。もとより、詩が一切の背景を無用とし、あらゆる註釈を拒絶する場合もある。しかし種々の実作にあたっては、そのような主張をにわかに肯定することはできない。「神曲」が、「ファウスト」が、その際立った例であろう。我々の「ズライカ書」においても、久しい研究の成果は、ゲーテ自身が付した「註釈」以上に、その「よりよき理解のために」かくことのできないものなのである。さてゲーテは、たわむれをよそおいながらマリアンネの心を愛へとさそいよせた。そうして彼女の心にあふれ出た真情にペルシアの衣裳をまとわせ、これを諧謔のヴェールで包むことによって、現実の厳粛を詩の世界に救いあげる。まことに芸術は人生から生まれる。が、シラーが歌ったように「人生は厳粛であるが、芸術は朗かである。[65]」芸術の虚と人生の実とは皮膜一枚をへだてて相接している。この虚と実と、シュピールとエルンストとの危険きわまる戯れに見事に成功しているところに、この一篇の魅力があり、それはまた「ズライカ書」全体に通じる根本的な特徴なのである。

しかし、ゲーテとマリアンネの間に開始されたリーベスシュピールは忽ちにしてエルンストへ、そうして彼らの負うている人間的制約のゆえに悲劇へと進んでいかなければならなかった。我々はその苦悩とそれからの脱出の姿をも、この「書」のなかから読みだすことができる。

Suleika

Was bedeutet diese Bewegung ?
Bringt der Ost mir frohe Kunde ?
Seiner Schwingen frische Regung
Kühlt des Herzens tiefe Wunde.

Kosend spielt er mit dem Staube,
Jagt ihn auf in leichten Wölkchen,
Treibt zum sichern Rebenlaube
Der Insekten frohes Völkchen.

Lindert sanft der Sonne Glühen,
Kühlt auch mir die heissen Wangen,
Küsst die Reben noch im Fliehen,

Die auf Feld und Hügel prangen.

Und mir bringt sein leises Flüstern
Von dem Freunde tausend Grüsse;
Eh noch diese Hügel düstern,
Grüssen mich wohl tausend Küsse.

Und so kannst du weiter ziehen!
Diene Freunden und Betrübten.
Dort wo hohe Mauern glühen,
Find' ich bald den Vielgeliebten.

Ach, die wahre Herzenskunde,
Liebeshauch, erfrischtes Leben
Wird mir nur aus seinem Munde,
Kann mir nur sein Atem geben.

何を示すやこのそよぎ。
東風のもちくるやよき報せ。
動くつばさのすがしさは
心の深きいたでをひやす。

あやしながられに戯れて、

ほこりを軽き雲とあげ、
たのしく群るる虫たちを
安けき葡萄の棚へおう。

燃ゆる日の熱やわらげつ、
わが熱き頬をもひやす、
飛びさりながら野に丘に
光る葡萄に口づくる。

我には低くささやけり
かの君のいとしき言葉。
丘々くらくならぬまに
千の口づけ我うけん。

されば汝は去るもよし。
悲しめる友らに仕えよ。
高き塀もゆるかなたに
我いとしき人を見いでん。

ああ真実の心のしらせ、
愛の息吹、すがしき命、
彼の口のみ我に与えん、
彼の息のみ我にえ与う。

一六一五年九月十八日、ゲーテはゲルベルミューレを去ってハイデルベルクにきていた。マリアンネとの詩的結合はなされ、すでにドゥエットはなりはじめている。ちょうどそのとき、ヴィレマー夫妻が彼を訪ねたのである。それは四日間の滞在にすぎなかった。しかしこの短い日々が、ゲーテとマリアンネの愛を頂点に高め、かくして「ズライカ書」を完全に咲きほころばせることになった。上の詩は九月二十三日の作で、これまたマリアンネがフランクフルトからハイデルベルクに向う車中になったものとされている。車は南のハイデルベルクに向うのであるから、恋人の便りをつたえるべき風は南風でなければならない。しかしボイトラーもいうように[66]、東風はペルシア文学では愛の使者である。まきあげるほこりもまた東方の恋愛詩にしばしば用いられるモティーフである[67]。我々はここでもまずこの詩の東方風の装いに注意しておく必要がある。一篇の面白さは、車の進むとともに移りかわる風物がつぎつぎと歌いつがれ、それらが軽快なリズムにのって、まるで我々が車にゆられていくような感興を覚える点にある。しかも目にふれるものたちがすべて愛するものへの思いに結びつけられ、最後の一聯にいたって風のそよぎは念頭を去り、ひたすら愛するものの息吹きが彼女の心を占める。歌う人の心の推移は詩の一語一語にまで刻みつけられている。ボイトラーが指摘しているように[68]、詩の出だしはアレグレットである。Bewegung, Schwingen, spielen, jagen, treiben 等のはずむような言葉がそのリズムを支える。第三、四聯はアダージオになる。lindern, kühlen, flüstern, grüssen のように、i, ü のこもったひびきをもつ母音が多く用いられてその効果を高める。そうして最後の二聯において、すべてが合流して愛のメロディーが高らかにひびきわたる。

この詩もまたゲーテによって二、三の手を加えられている。第四聯の

Und mir bringt sein leises Flüstern
Von dem Freunde tausend Grüsse
(そして東風のかすかなささやきは
友の千の挨拶を私にもたらす)

はマリアンネの原詩では

Und mir soll sein leises Flüstern
Von dem Freunde lieblich grüssen
(そして東風のかすかなささやきは
友のいとしい挨拶を私につたえる筈である)

となっている。bringt という平叙の形は、soll によって願いをこめたい方よりはよほど単調であろう。また、tausend も lieblich も同じく日常的な言葉であるが、後者の方がはるかに女性らしいやさしさを感じさせるであろう。がゲーテによる最も重大な修正—マリアンネからすれば惜しみてもあまりある改悪—はそれに続く二行である。

Eh noch diese Hügel düstern,
Grüssen mich wohl tausend Küsse.
(丘々がくらくならないうちに

千のロづけが私に与えられる)
これはマリアンネの詩では
Eh noch diese Hügel düstern,
Sitz ich still zu seinen Füssen.
(丘々がくらくならないうちに
私はそっとあの方の足もとに坐する)
である。今マリアンネは、心から敬愛する恋人のもとへ急いでいる。すでに Hochbeglückt と歌って高潮した彼女の心は、再会を目前にして喜びと期待にふるえている。が相手の愛を信じてはいても、彼女は相手から平然として千のロづけをうけようとしているのではない。心からしたいながら、彼女は相手に対してあくまでも慎しくへりくだった態度を失わない。そっとあの方のもとに坐する、これが彼女の願いのすべてなのである。そよ風にふれて動いた彼女の心のときめきは、ただそっとよりそいたいという、熱烈なしかも控えめな願いとわかちがたく結びついていた。「ゲーテが どうして書きかえたのか、私には理由がわかりません。私の詩の方がずっといいと思います」(ich weiss wirklich nicht warum, ich finde die meine wirklich schöner)とマリアンネは後年書いているが[69]、彼女の心中は容易に想像できる。ブールダハが、マリアンネの原詩の方をゲーテの改作にくらべて「無限により真実である」[70](unendlich echter)と評しているのは当然である。

これに続く第五聯は

Und so kannst du weitergehen!
Diene Freunden und Betrübten.
(ではお前は行ってもよい。
悲しんでいる友たちに仕えておあげ)
であるが、マリアンネではその二行目が
Diene Frohen und Betrübten.
(楽しき人また悲しき人に仕えておあげ)
である。コルフによれば、ゲーテの修正はウンローギシュであるといわれるが[71]、Freunden und Betrübten (友たちと悲しき人たちに)は betrübten Freunden (悲しんでいる友たちに) とすれば意味は通る。しかし原詩で十分であるものをわざわざ変えてみる必要は全くないであろう。なおその聯の最後の一行
Find' ich bald den Vielgeliebten.
(私はまもなくいとしき人を見いだす)
は、はじめ
Finde ich den Vielgeliebten.
であった。この点だけは、コルフもいうように[72]、改作によってリズムが一そう充実してきたといえるであろう。

ゲーテのこれらの改作は、マリアンネの真意をいたくそこねる結果になっているが、しかしそれは彼が故意にやったのではなく、記憶の誤りであったとされている[73]。我々もまたゲーテがあまりに自己の記憶にたよりすぎたことを残念に思う。しかしかりに無意識のうちになされたにしても、これらの修正に見られる共通した点は、原詩の真率でひたむきな調子をやわらげ、これにシュピールの性格を

付与していることであって、それがまた「ズライカ書」全体の調子に合致していることも認めざるをえない。それは、先の詩において「わが命のすべて」を「豊けき命」と置きかえたのと全く同じ精神によるのである。あくまでも体験の真実を重視するコルフは、非難の意味をこめて、この修正によって原詩は「東方風な、いくらかありきたりとさえいえる仮装詩（etwas konventionelle Maskenpoesie）となった」[74]といっているが、その成否を別とすれば、原詩が東方風となり仮装詩となることこそは正にゲーテが望んだところであった。

ところで、後の修正によって原詩がどのような装いをこらそうとも、それを寄せられた当初のゲーテは、その詩の本来の心を、従ってマリアンネの真情の告白をそのままに感じとったにちがいない。その時の彼の感動は、この詩につづく「再会」„Wiederfinden“において高い調べを発している。

Ist es möglich! Stern der Sterne,
Drück ich wieder dich ans Herz!
Ach, was ist die Nacht der Ferne
Für ein Abgrund, für ein Schmerz!
Ja du bist es! meiner Freuden
Süsser, lieber Widerpart;
Eingedenk vergangner Leiden
Schaudr' ich vor der Gegenwart.

ありうることか、星の星、
君をふたたびかきいだく。
ああはなれいる夜こそは
なんたる奈落、痛苦ぞや。
さなり、君なり、喜びの
あまきいとしき半身ぞ。
過ぎてし悩み思うとき
我はおののく今この時に。

星のなかの星よ、そなたをこの胸にかきいだくなどということがありうることだろうか。今のこの歓喜を思えば、すぎた幾日かの孤独と寂寥が恐ろしいほどの苦痛であったことが思いしらされるが、今が幸福であればあるだけ、また別れねばならぬことを思うて戦慄を禁じえない。ここには、思いがけない再会の驚喜がある。がすぐまた—そしてこの度は永久に—別れなければならない予感のおののきがある。瞬間ははかない。美しきものは滅びねばならぬ。がはかなく滅び去るゆえに瞬間は一そうその美しさをますのである。ある日本の詩人は、人生の生甲斐はつかの間の逢う瀬の喜びと別れの悲しみにつきるといったが、同じ思いが今ゲーテの心をもとらえているのである。日本の詩人とゲーテとのちがいは、前者が美しき瞬間につかれたまま身を滅ぼしたのに対し、ゲーテは瞬間をのりこえ、それから距離をとることを心得ていた点にあるであろう。美の絶対を

認めつつも、そのために人間が失格するにいたることは、人生の詩人ゲーテにとって許されぬことであった。ゲーテは、愛の歓喜の絶頂において、それからの別離と逃走をあらがいがたいデーモンのうながしとして感じる人間であった。それは、ファウストがその恋の恍惚境においてグレートヘンにいった言葉を思いださせる。

あなたに身も魂もささげます。
そして永遠の歓びを感じます。
永遠—それが消えたらもう私は絶望だ。
いや消えることはない。決して消えはしない。
(3191～4)

ファウストはなぜ喜びの絶頂においてその喜びの消え去ることを、絶望を、口にするのか。それは喜びの瞬間のすぎ去ることが、絶望のさけがたいことが、彼の胸をかすめるために他ならない。事実、彼はグレートヘンを捨てた。そしてゲーテはフリデリーケを捨てた。ではなぜゲーテは瞬間からの逃走を企てるのか。それにはほぼ二つの動機が考えられる。一つは、無限追求を己れの使命とするものにとって、瞬間にとどまることは許されないからである。一所不住の決意が彼の存在の大前提なのである。もう一つは、美しき瞬間の実現のために、わが身は譲歩と諦念を余儀なくされるからである。恋の恍惚境において、すべては現実を超脱して天の高みに飛翔する。がそのあとに来るものはすべて地上界への下降にすぎぬ。あるいはえられるかもしれない地上の幸福といえども、美しき瞬間の形骸に他ならない。美しき瞬間はただ詩の世界においてのみとどめられることができる。それを更に現実にまで引きずりおろすことは彼にとってたえられないことであった。そのかぎりにおいて、ゲーテもまた美を至上とする一個のエステートであった。が彼が一般の芸術至上主義者と異る所以は、美の尊厳を守りつつも、美と人生の矛盾する相を深刻に体験し、痛苦をしのんでからくも人生の場にかえりえたことである。詩人とは何か。詩人とは「美しき瞬間」に向って「とどまれ」と呼びかける人間である。そうして、己れの悩みをも喜びをも、美しく歌うべき宿命を負う人間である。が瞬間を美として定着させるために、別離の時が迫ってくるとき、彼はその瞬間の美しさ尊さにいよいよ心を奪われそうになる。かくして、美しきものより別れるさだめを負うた彼は、「おもてをそむけて」逃れていかなければならないのである。[75] 今ゲーテはこの詩において、殆どその仮面をはずして、美しき瞬間におそわれた己れの危機を告白しているように思われる。コルフはこの第一聯が、自分の妻にのみ語りうるような真率な(innig)響きをもっているというが、[76] 正当であろう。

第二聯以下は、このような彼らの愛の、いわば宇宙論的な基礎づけである。神の「生まれ出よ」という意志によって世界はもろもろの現象に分裂した。光と闇がわかれ四大が生成する。が個別化した世界は憧れも知らず響きを発することもない。宇宙の寂莫とともに神もまた淋しさを感じ曙光をつくった。曙光は宇宙の荒涼をあわれ

み、鳴りひびく色彩のたわむれをつくってやった。ここに愛の活動がはじまる。本来一つとなるべきものは互いに求めあう。この宇宙に働く愛こそは今ズライカとハーテムを結びつけるものなのである。二人は本来一つとなるべきものであるから、もう一度神が「生まれ出よ」と叫んでも、もはやわかたるべきものではない。

だが、わかたるべきでないという願いがいかに切実であっても、それが地上の子の願いにとどまるかぎり、実現することはできない。彼らの愛の完成は天国においてのみなしとげられる。この意味で、「ズライカ書」は「西東詩集」の最後におかれた「天国の書」を予想するのである。ファウストがその結末において、かつてグレートヘンとよばれし女の導きによって天上にのぼるように[77]、ハーテムは、天国の門を守る美しきフーリとの語らいによってその愛の永遠を信じるにいたる[78]。がそれは所詮現実のことではない。天国で結びつくとは、現世における別離の悲劇の裏返しの表現に他ならない。再会の驚愕に近い歓喜は、いわば詩人の諦念の逆説的な告白なのである。

この詩が作られたのは九月二十四日である。二十六日、彼らは再び会うことを約して別れたが、それが二人の永遠の別離となった。この詩を書いたときすでに、彼の心には、再び会うてはならぬというひそかな決意があったであろう。だから彼は、過ぎ去った苦悩を思い同時にまた来たるべき別離を予感し至福なるべき現在の前にふるえおののくのである。かくの如く、我々はこの詩をゲーテの悲劇的体験の表現と解する。がこれに対してはっきりと反対の立場をとるのはシュタイガーである。彼はいう。「彼らのこの夏の体験を悲劇の光でてらすのはすこぶる誤っている(sehr unrecht)。証拠書類は疑いようもなく別のことを語っている[79]。」彼はその理由として二つのことをあげている。第一に、第三者たるヴィレマーの嫉妬がここに見られないこと。第二に、ゲーテもマリアンネも、結婚によってひかれた一線をふみこえることがなかったこと。だが、この二つの事情がないことは、彼らのおかれた状況が悲劇的でなかったという理由にはならない。ヴィレマーが嫉妬しなかったばかりでなく、彼がむしろ二人の間柄のスムーズな展開を望んでいたことはすでに述べた[80]。彼らの詩的結婚がリーベスシュピールからリーベスエルンストとなるにあたって、周囲にそれを妨げる事情は何らない。またもしあったとしても、ゲーテがもしそれを望むならば、その障害をのりこえることはさして困難ではなかったであろう。我々はそのようなことを悲劇的といっているのではない。それは全く彼らの内面性の問題なのである。「美を見しものは死なねばならぬ[81]」という。が美を救い、自らもまた生きえんがためには、別離と諦念が不可避であった。だから彼は、これまでも幾たびかなしとげた脱出を今また試みようとするのである。我々はその後の「証拠書類」をたどることによって、彼らが疑いようもなく悲劇的状況にあったことを知りうるであろう。

二十六日、ゲーテに別れたマリアンネは再びフランクフルトに向う。再会の約束はなされていた。しかしマリアンネは、それと明らかに語られはしなかったにせよ、ゲーテの決意を予感していたであろ

う。その途上で彼女が歌った、西風によせる詩は、このような背景において味わわれねばならぬ。

Suleika

Ach, um deine feuchten Schwingen,
West, wie sehr ich dich beneide :
Denn du kannst ihm Kunde bringen,
Was ich in der Trennung leide !

Die Bewegung deiner Flügel
Weckt im Busen stilles Sehnen ;
Blumen, Augen, Wald und Flügel
Stehn bei deinem Hauch in Tränen.

Doch dein mildes sanftes Wehen
Kühlt die wunden Augenlider ;
Ach für Leid müsst' ich vergehen,
Hofft' ich nicht zu sehn ihn wieder.

Eile denn zu meinem Lieben,
Spreche sanft zu seinem Herzen ;
Doch vermeid ihn zu betrüben
Und verbirg ihm meine Schmerzen.

Sag' ihm, aber sag's bescheiden :
Seine Liebe sei mein Leben,
Freudiges Gefühl von beiden
Wird mir seine Nähe geben.

ああ西風よ、しめりたる
汝が翼こそねたきかな。
別れてなやむ思いをば
君につげうる汝なれば。

汝がはばたきはひそかなる
こがれを胸にめざましめ、
花もまなこも春、小山、
汝のいぶきに涙ぐむ。

されどやさしく吹ききたり
いたむまぶたをひやさしむ。
ああまたあう日ののぞみずば、
我は悩みにたおれなん。

急げ恋しき君の辺へ、
語れやさしくみ心に。

さわれ君をな悲しめそ、
わが痛みをばかくせかし。

告げよされどもひかえめに、
君が愛こそわがいのち、
共にあるうれしき思い
君がかたえにありてこそ。

この一篇をみたすものは別離の悲愁である。しかもこの痛切な響きを、絶叫としてではなく優雅として感ぜしめるのは、マリアンネの愛の詩に通じて見られる慎ましい態度である。「君が愛こそわがいのち」とつたえることを西風にたのみながら、そして「ああまたあう日ののぞめずば、我は悩みにたおれなん」とまでいいながら、しかも彼女は、それをそっと語っておくれ、あの方を悲しませてはならない、というのである。むろん、この詩の背後にはハーフィズの類似の詩がある。「東風よ、どうぞあの方にそっとつたえておくれ、／もえるこの胸の思いを百もの舌でつたえておくれ、／けれどあの方をも悲しませてはいけない、悲しそうにいってはいけない、／それとはっきりつたえはしても、よく気をつけていっておくれ。」しかしマリアンネの詩は単なるパロディーではない。東方のヴェールで装いながらも、その深く迫る内的な調べは、彼女の真情のあふれて流れ出たものと見なければならない。そうして、この詩からひるがえってハイデルベルクの幸福な日々をかえりみるとき、それがいかに間近に迫った別離の苦悩に色どられたものであったかを思わないわけにはいかない。喜びの日に早くも悲劇ははじまっていたのである。思いはゲーテにおいても同じであった。西風によせたマリアンネの詩がつくられた同じ日に彼は歌っている。

Deinem Blick mich zu bequemen,
Deinem Munde, deiner Brust,
Deine Stimme zu vernehmen,
War die letzt' und erste Lust.

Gestern, ach, war sie die letzte,
Dann verlosch mir Leucht und Feuer;
Jeder Scherz, der mich ergetzte,
Wird nun schuldenschwer und teuer.

汝が目ざし、汝が唇、
汝が胸に我を忘れて
汝が声に耳かたむくる、
そは無上の喜びなりき。

昨日ああそは夢となりぬ、
わが光わが火は消えぬ。

たのしかりしざれ言も
今はせつなく心に重し。

一日おいて二十八日、彼はロゼッテ・シュテーデルに手紙を書いた。ロゼッテはヴィレマーの最初の妻との間にできた娘である。ゲーテがロゼッテにあててマリアンネにあてなかったのは、マリアンネに対するいたわりからであると考えられるが、内容はすべてマリアンネ自身にかかわる。「親しい方たちに別れてから、今まではただ気づかわれていたにすぎない病気が本当になってしまいました。胸痛が心臓の痛みになりそうでした。ハイデルベルクの風と、変りやすい城の気温の当然の結果です。別にこちらで呼びもたずねもしませんでしたが、ドクトル・ネーゲリ氏がこれについて詳しく説明してくれました。いくらかの諦念によって現在の不如意を、いくらかの注意によって将来の不如意を、すっかり幸福にかえることができるでしょう。…すぐまたお便りをください。それはドクトル・ネーゲリ氏の処方にも役立つことでしょう。」[82] この書簡全体の調子は、何か思わせぶりな、真意をぼかすような、諧謔めいてそれがすっと通ってこない奇妙なものであるが、このみだれた調子は、マリアンネとの別離による彼の心の動揺を示すものに他ならない。そうしてこの書簡のなかには、東の国からもたらされた「一にして二である」裂け葉銀杏（ギンゴ・ビローバ）の詩がおさめられているのである。それは、からくももちこらえることのできた彼らの詩的結婚を象徴するものである。

なおこれに関連して、ロゼッテあての書簡についてゲーテが日記につけたアラビア語の符徴が、研究者たちによって取りあげられている。[83] それは「彼は叫んだ」または「絶叫」という意味であるとして、ゲーテの心裡に結びつけて解されている。[84] しかしシュタイガーによれば、それはペルシア語の「呼び声」にわずかに似ているというだけで、それを認めぬならば読解は不可能である、総じて、ゲーテの日記のなかに彼の個人的な告白を読むのは正しくない、[85] という。このような疑義がある以上、我々はこれを論拠とすることはできないであろう。

がこのことは、この時期における悲劇的様相をも否定することにはならない。我々はなおしばらくその経過をたどってみよう。

ちょうどその頃、カール・アウグストがハイデルベルクに到着して、ゲーテとともにフランクフルトに行こうという提案がなされた。加えて、ゲーテが嫌っていたヴァイマルの女優カロリーネ・ヤーゲマン―アウグストの愛人―もやってくるという。この時ゲーテは異常といってよいほどの取り乱した状態におちいる。この時期のことを詳しくつたえたボワスレーの日記はつぎのように記している。「十月六日、朝、ゲーテは突然出発しようといいだす。遺書を書く、と彼はいう。[86]」「十月七日、早朝からゲーテはおちつかない。―病気になりはしないかと恐れている。正午にはもう出発しようという。…車中老人（デル・アルテ）は次第に元気になる。大公やヤーゲマンに追いつかれないという安心が明らかに彼の心をおちつかせる。[87]」このゲーテの不安は、アウグストとヤーゲマンに関してのみ語られているよう

に見える。しかし彼が恐れたのは、アウグストらとともにまたフランクフルトに出かけることであった。それは、からくも逃れえたと思ったマリアンネの魅力圏に再びひきもどされることを意味したであろう。それを彼は避けようとしたのである。でなければ、彼がここで「遺書を書く」などという異常な言葉を突然口にするはずがない。だから彼は、そこを去って、もうアウグストらに追いつかれる心配がなくなってはじめておちつきをとりもどしたのである。一方彼はロジーネにあてて書いている。「私は昨日までは、いつでもあなたにおあいできると思っていましたが、今はもう引きずられるような思いでヴェルツブルクをへてかえらなければならないのです。ともかく私を旅に出させていただきたい、それを、避けることのできない必然と考えさせていただきたいのです。」[88] 同じくヴィレマーとマリアンネにあてていう。「私はヴェルツブルクをへてかえります。勝手に、また意志にさからってではなしに、予め定められた道を歩み、それだけ一そう純粋に、別れていく人たちを憧れることができるという、ただその思いだけが私の心をおちつかせてくれるのです。」[89]

「避けることのできない必然」―それはゲーテが詩人としてまた生活者として、苦渋にみちたしかし豊かな体験のあげく自らえらびとった必然であった。彼はそれを、自己の存在を全うするためには動かすことのできぬ「予め定められた道」と考える。「憧れは別れることによって一そう純粋になる。」がむろんゲーテは、憧れのために実生活を否定するというような、たわけた感傷をいっているのではない。詩人として定められた彼にとって、体験の詩化は至上命令であり、そのかぎりで生活者としての自己を救おうとするのが彼の生活信条であった。「ズライカ書」全体の表層を支配するものはたしかに優雅なる理知のたわむれである。それをよそおうことは作者ゲーテの願いでもあった。しかし、ゲーテが時として意識的に、そして多くは知らずしてのぞかせたその背後には、情熱の暗い深みがある。それは、どこまでも意識の支配を保とうとしつつ、しかも心の奥底から震憾せしめられた愛であった。シュタイガーは、ここに悲劇を見ることをはっきり否定しているが、我々はこの点に関して、彼のインタープレタツィオーンがかなりゆがんでいることを主張せざるをえない。

さて我々はこれまで「ズライカ書」の二三の詩を通じて、ハイデルベルクにおける再会と別離との、歓喜と痛苦を読みとることができた。が再び「ズライカ書」そのもののなかでこれらの詩を読むとき、それらは全く別の様相を呈する。永遠の別離を歌った「汝が目ざし、汝が唇」は、再会の期待にふるえる「何を示すやこのそよぎ」の前におかれる。別離の悲愁をつたえるズライカの「ああ西風よ、しめりたる汝が翼こそ」は、再会の歓喜をうたう「ありうることか星の星」の前にうつされる。ゲーテの諦念をすでに暗示するような「ギンゴ・ビローバ」はこの「書」の前半にもっていかれる。つまり、「ズライカ書」の構成においては、出会いから別離にいたる彼らの恋愛体験の推移ははじめから故意に打ちこわされているのである。ゲーテの「ズライカ書」編纂の意図は、すでにふれたよう

に、自己の体験のあらわな告白ではない。今彼の芸術意志は、体験から距離をとることによって、「西東詩集」全体を支配するシュピールの性格をこの「ズライカ書」にも一貫させることであった。シュピールの世界はしかしまた現実界を超脱する。そこにも別離の悲しみはあるが、しかしそれは救いなき絶望であることを要しない。だから、やがて天国に迎えらるべき愛のシュピールは、この「書」の結末では、恋人の、また恋そのもののアポテオーゼで終ることができるのである。

我々は以上において、「西東詩集」の根本性格からして、「ズライカ書」の読まるべき視点について論じ、その立場から二三の詩についてインタープレタツィオーンを試みた。むろん「ズライカ書」の問題はこれにつきるのではない。そのロマン主義との関係、そこに含まれる神秘主義の問題等はなお多くの論点を与える。がそれは「ズライカ書」の世界をはるかにこえ、「天国の書」を主題とすることによって十分論じられうるであろう。それらについては別の機会にゆずらなければならない。

（二七・五・一九六一）

註

（1）古典主義の作品が自国に主人公と舞台を求めがたいこと、要するに近代と古代のへだたりを克服する困難、これは「ヘルマンとドロテア」制作の前後ゲーテが苦慮したことであるが、シラーとの文通にまざまざとその痕跡を残している。Vgl. E. Staiger: Goethe, 1. Bd. Theoretisches Nachspiel, besonders S. 289 ff.

（2）Belagerung von Mainz. Cottas Jubiläums=Ausgabe, 26. Bd. S. 251.

（3）Kampagne in Frankreich. Cottas J. A. 26. Bd. S. 60.

（4）Eckermann: Gespräche mit Goethe, 16. II. 1826. Brockhaus 1949, S. 139.

（5）Des Epimenides Erwachen, 859~10. J. A. 9. Bd. S. 178.

（6）Goethes Brief an Iffland am 15. Juni 1814. Weimarer Ausgabe, 4. Abt. 24. Bd. S. 299.

（7）Zitiert in Staigers Goethe, 3. Bd. S. 8.

（8）Divan, übersezt von Joseph von Hammer-Purgstall (1812~13).

（9）Annalen, J. A. 30. Bd. S. 280.

（10）Vgl. Korff: Der Geist des westöstlichen Divans, Die Lebensidee Goethes, S. 51 f. またエルマティンガーはいう。「ゲーテのディーヴァンのなかに、アラビア・ペルシア的文化のそのままの姿を求めようとしてはならない。ディーヴァンはそういうものではない。」E. Ermatinger: Die deutsche Lyrik, 1. Bd. Teubner 1921, S. 229.

（11）J. Burckhardt: Griechische Kulturgeschichte, Kröners Taschenausgabe, 1. Bd. S. 202. しかしゲーテの東方研究そのものが根拠のないものなのではない。彼の歴史眼がいかに東洋を全体としてとらえ、理念と現実を融和し、過去と現在を統合しえているかは、ディーヴァンに付せられた「註解」の部分がよくこれを実証している。歴史家としてのゲーテのこの面はマイネッケも非常に高く評価している。Vgl. Fr. Meinecke: Die Entstehung des Historismus, Werke, 3. Bd. Oldenburg Verlag, S. 574 f. またシェーダーによれば、「ディーヴァンは東方研究のマーグナー・カルタとよばれてよい」とさえいわれている。Vgl. Schaeder: Goethes Erlebnis des Ostens, 1938, S. 74.

（12）„Freisinn" in „Buch des Sängers."

（13）J. A. 1. Bd. S. 242.

（14）ゲーテの非政治性、反社会性に対するはげしい非難はヴォルフガング・メンツェルにはじまる。ハイネ、ベルネらの若きドイツがこれにつづく。それはゲーテ疎遠の一時代といってよいが、今日においてもその流れはある。これに対し、ゲーテ復活の先駆的役割を果したのは、「ズライカ書」の研究に道をひらいたヘルマン・グリム、特に、ベルリン大学の一八七四

一五年、冬学期における彼のゲーテ講義であろう。ヴィクトル・ヘーン、グスタフ・フォン・レーパー、クーノー・フィッシャーがこれにつづく。今日、マン、ヘッセ、カロッサがこの流れをつぐことはいうまでもない。ゲーテに対するこのようなプロ・エト・コントラの歴史は R. Buchwald: Goethezeit und Gegenwart, Kröner, 1949 にくわしい。

(15) „Unbegrenzt" in „Buch Hafis."

(16) ドストイェーフスキー「地下生活者の手記」新潮文庫、米川訳、一八三頁。

(17) „Einladung" in „Buch Suleika." フォン・レーパーはこの詩句を「時間性にわずらわされぬ永遠な世界へ自分に従ってくるようにという詩人の要請」と解している。Vgl. v. Loeper: West-östlicher Divan, 1872, S. 121. これに対しデュンツアーは異をとなえ、フォン・レーパーは「この詩全体が恋人に向けられていること」を見のがしているのであって、彼の見解は「奇妙」であるという。Vgl. Goethes West-östlicher Divan, erläutert v. H. Düntzer, 1878, S. 316. しかし、詩の表面の意味はもとより恋人自身への呼びかけであるにしても、その背後に、フォン・レーパーのいうゲーテの思想を読むことは不可能ではない。ゲーテの意図如何にかかわらず、ゲーテの思想的深さがおのずから読者をその方へさそいこむのである。むしろこのような象徴と寓意の面白さが、西東詩集全体の一つの特徴なのである。「世界を内面的に、精神において自己にひきつけるために、外的世界の束縛を脱する」というコルフの解釈は、われわれの意味においてうけとることができよう。Vgl. Korff: Die Liebesgedichte des West-östlichen Divans, S. 68.

(18) ゲーテは自己のエゴイスムスについてしばしば語ったが、フレデリック・ソレーは、このことについてゲーテと注目すべき議論をかわしたことがある。ソレーが、功利主義は利己主義ではなく、各人が全体の幸福のために働くことを自己の幸福の不可欠の前提とするものだといったのに対し、ゲーテはこう述べている。「私はなぜ個人の利益を多数のために犠牲にしなければならないのかわからない。…私は作者として大衆の利害をかつて念頭においたことがない。つねに真実を語り、それ自身よいと考えいと確信したことだけを書くようにしてきた。がそれによって、別に私の主要目的ではなかったが他人の幸福も促進されることになった。個人が全体のため犠牲をささげなければならないという要求は誤った原理だと思う。誰でも、自分自身の確信にこそ犠牲をささげなければならないのだ。」Goethes Gespräche, Gesamtausgabe, herausgegeben von Biedermann, 1910, 4. Bd. S. 302. Auch Frédéric Soret: Zehn Jahre bei Goethe, deutsch von Houben, Brockhaus, 1929, S. 474.

(19) „Phänomen" in „Buch des Sängers."

(20) Korff: Die Liebesgedichte des West-östlichen Divans, 1947, S. 50.

(21) Pyritz: Goethe und Marianne von Willemer, 1941, S. 17 f.

(22) Goethes Ankündigung des West-östlichen Divans in „Morgenblatt", 1816, Hamburger Ausgabe, 2. Bd. S. 269.

(23) 厳密にいえばこれが最初ではない。ヘッカーの編纂したゲーテとマリアンネの書簡集によれば、一八一四年八月十一日、マリアンネはゲーテにあて一詩をよせている。

Zu den Kleinen zähl ich mich,
Liebe Kleine nennst du mich.
Willst du immer so mich heissen,
Werd ich stets mich glücklich preisen,
……

……

ゲーテが彼女を Liebe Kleine と呼んだことに対する彼女の実に無邪気な応答の言葉である。マリアンネはゲーテにこの愛称でよばれたことがよほどうれしかったらしい。ヴィレマーにもそのことが目についたらしく、この詩にそえて、「私の妻は…あなたに Kleine と呼ばれて以来全然大きくなろうといたしません、あなたの心のなかでなら別でしょうが」と諧謔的にいっている。Vgl. Hecker: Goethes Briefwechsel mit Marianne von Willemer, Insel, S. 75 und 358.

(24) Brief von Marianne an Goethe am 2. Nov. 1828. Hecker: ibid. S. 262.

(25) H. Grimm: Goethe und Suleika. Funfzehn Essays, Erste Folge,

Bertelsmann, 1884, S. 275.

(26) 成立当初マリアンネに直接関係のないものとしては，たとえば冒頭の Einladung と末尾の In tausend Formen magst du dich verstecken がある。マリアンネをうたって他書に移されたものとしては，Ja, die Augen waren's, ja, der Mund が Buch der Liebe に，Die Flut der Leidenschaft が Buch der Sprüche に，Sprich! unter welchen Himmelszeichen と Süsses Kind, die Perlenreihn が遺稿におさめられている。

(27) Gundolf : Goethe, S. 650.

(28) Vgl. Düntzer : ibid. S. 315. この解釈は広く行なわれ，いくつかの邦訳もこれに従っている。

(29) Burdach : J. A. 5. Bd. S. 379.

(30) Richter : Goethes Werke, Festausgabe, Bibliogr. Institut, Sonderdruck, S. 318.

(31) Korff : ibid. S. 68 f.

(32) Beutler : West-östlicher Divan, Sammlung Dieterich, Bd. 125, S. 565.

(33) Richter : ibid. S. 323.

(34) たとえばシュタイガーは，「イフィゲーニエ」のなかでオレストがイフィゲーニエにいう言葉，

Seit meinen ersten Jahren hab ich nichts
Geliebt, wie ich dich lieben könnte, Schwester

をひいてつぎのようにいっている。「この言葉は精神的素材に十分とけこんでいない。Schwester という言葉は，二年前になくなったゲーテの妹ユルネーリアを思い出させずにはいない。これは作品のもつ亀裂である。「人は芸術作品をこのような批評によってこぼちはしないかと恐れる必要はないのである」と。Vgl. Staiger : ibid. 1. Bd. S. 351 f. 文芸作品をあくまで作品そのものから理解しようとするシュタイガーにこの言葉のあるのは注目すべきである。同じことはわれわれのこの場合にもあてはまる。

(35) Korff : ibid. besonders S. 113 f. und 221 f.

(36) Gundolf : ibid. S. 645.

(37) ブールダハの「西東詩集」研究は五十年の久しきにわたる。その数篇の論説と註釈とは「西東詩集」の研究の基礎をきずいたものといってよい。筆者は特に彼の Die älteste Gestalt des west-östlichen Divans (1904) において，文献学的研究の偉大さにふれることができた。先年，フライブルク大学の研究室でこの論文を読んだときの感動を想起し，ここにブールダハ教授に感謝の意を表しておきたい。右の論文は，K. Burdach : Zur Entstehungsgeschichte des west-östlichen Divans, Drei Akademievorträge, herausgegeben von Ernst Grumach, Akademie-Verlag, 1959. におさめられている。

(38) Burdach : Goethes west-östlicher Divan in biographischer und zeitgeschichtlicher Beleuchtung, Goethe-Jahrbuch, 17. Bd. S. 27.* *印は原典のまま。特別寄稿として巻末に頁数をあらためておさめられていることを示す。

(39) Max Hecker : Goethes Briefwechsel mit Marianne von Willemer, Insel-Verlag.

(40) H. Pyritz : Goethe und Marianne von Willemer, Eine biographische Studie, Metzler, Stuttgart, 1941.

(41) Korff : ibid. S. 38 f.

(42) Korff : ibid. S. 38.

(43) J. A. 5. Bd. S. 240.

(44) J. A. 5. Bd. S. 240.

(45) J. A. 5. Bd. S. 195.

(46) Korff : ibid. S. 39 f.

(47) Gundolf : ibid. S. 646.

(48) Gundolf : ibid. S. 668.

(49) Staiger : Die Kunst der Interpretation, S. 9 ff.

(50) マリアンネが幼い頃はじめて手にした絵入りの本はゲーテの「ローマの謝肉祭」であったという。Vgl. Hecker : ibid. S. 7.

(51) Korff : ibid. S. 97 f. und 211.

(52) Burdach : Goethes west-östlicher Divan in biographischer und zeitgeschichtlicher Beleuchtung, Goethe-Jahrbuch, 17. Bd. S. 22.*
(53) Beutler : ibid. S. 563.
(54) Hecker : ibid. S. 15.
(55) Hecker : ibid. S. 16.
(56) Pyritz : ibid. S. 13 ff.
(57) Hecker : ibid. S. 70 f.
(58) Hecker : ibid. S. 71.
(59) Hecker : ibid. S. 71 f.
(60) Hecker : ibid. S. 72.
(61) Hecker : ibid. S. 72.
(62) Vgl. Pyritz : ibid. S. 16 f.
(63) Vgl. Beutler : ibid. S. 562 f.
(64) Pyritz : ibid. S. 12.
(65) Schiller : Prolog zu Wallenstein, Z. 138.
(66) Beutler : ibid. S. 626.
(67) ほこり (Staub) はたとえば „Allleben“ in „Buch des Sängers“ にも効果的に用いられている。
(68) Beutler : ibid. S. 627.
(69) Mariannes Brief an Hermann Grimm am 21. Januar 1859. Grimm : ibid. S. 275.
(70) Burdach : J. A. 5. Bd. S. 395.
(71) Korff : ibid. S. 115.
(72) Korff : Goethe im Bildwandel seiner Lyrik, 2. Bd. S. 185.
(73) Vgl. Beutler : ibid. S. 628.
(74) Korff : Die Liebesgedichte des West-östlichen Divans, S. 115.
(75) Vgl. Goethe : Pandora 761~2, J. A. 15. Bd. S. 169.
(76) Korff : ibid. S. 116.
(77) Vgl. Goethe : Faust 10284 ff.
(78) Vgl. die Worte des Dichters an Huri in „Buch des Paradieses“ :

Deine Liebe, dein Kuss mich entzückt!
Geheimnisse mag ich nicht erfragen ;
Doch sag mir, ob du an irdischen Tagen
Jemals teilgenommen ?
Mir ist es oft so vorgekommen,
Ich wollt' es beschwören, ich wollt' es beweisen :
Du hast einmal Suleika geheissen.

汝が愛の、汝が口づけのいかにうれしき。
汝がひめことあえてただきんとにはあらねど、
されどいえ、汝かつて
下界に住みしことなきや。
ふとしも我に思わるる、
いなと云いて我いわん、
汝こそはズライカと呼ばれし人ぞ。

この詩が作られたのは一八二〇年五月十日である。ハイデルベルクでの危機をくぐってすでに五年の歳月が流れている。ここで歌うのはもはやゲーテではなく「詩人」である。地上の愛は天上のそれに昇華し変容している。フーリもまたかつてのズライカの化身であるかの如くでもあり、またズライカを知らないかの如くでもある。ここには「天上のイロニー」(himmlische Ironie, Korff : ibid. S. 186) が支配しているのであって、ゲーテは今や自己の体験を天上の世界にまで象徴化することができた。現実の「美しき瞬間」を永遠化しえたゲーテは、再び現実にかえって、マリアンネと親密な交通をつづけながらも終生相会うことをさけるのである。
(79) Staiger : Goethe, 3. Bd. S. 42.
(80) ゲーテとの別離後、マリアンネは身心ともに危険な状態におちいった。それを察したヴィレマーは、一八一七年十月はじめ、ゲーテに書簡をよせている。彼はゲーテに、ヴァイマルを去って故郷に余生を送ることをすすめていう。「それはきわめて考えられることなのです。それで、あなたもご存知の町の数部屋はもう六カ月誰にもかしてありません。あなたがいつ

でもそこにお泊りになれるように、あるいは、家族の一員としてあなたにさしあげるためです。妻があなたの身のまわりをみ、経済上のこともきりもりするでしょう、—姪も十分気をつけてくれるでしょうし、そして私は、私はあなた方におまかせいたします。」ヴィレマーは自己の決意の重大性を意識したらしく、「この手紙は返事をいただくに値する」とつけ加え、さらに、必要ならゴータかアイゼナーハに赴いてじきじき相談したいとまでいっている。それにそえたマリアンネの文面には、ヴィレマーの希望は自分のものであるといい、「もしあなたから数行のご返事でもいただけたらどんなにうれしいでしょう、たとえそれによって、ヴィレマーが建て私が家具をととのえた空中楼閣がくずれてしまうことになりましょうとも」と書いている。Vgl. Hecker : ibid. S. 124 f. もとよりゲーテはこの申し出をていちょうにしかし厳粛に辞退した。

(81) Platen : Tristan, Werke, Meyers Klassiker=Ausgabe, 1. Bd. S. 61.
(82) Hecker : ibid. S. 83 f.
(83) Vgl. W. A. 3. Abt. 5. S. 378.
(84) Vgl. Pyritz : ibid. S. 47. ヴァイマル版の註釈者ヴァーレは、この符徴は説明がつかないといっているが、ピューリツは、ゲーテの心裡をうかがうべき„Schlüsselwort"であるという。しかしヴァイツが再び「おそらくペルシア語であろうがたしかな解釈はつけがたい」といっているのは妥当であろう。Hans-J. Weitz : West-östlicher Divan, Gesamtausgabe, Insel, 1951, S. 396.
(85) Staiger : ibid. 3. Bd. S. 241 f.
(86) Boisserées Tagebuch in Hans-J. Weitz : ibid. S. 399.
(87) Boisserées Tagebuch in Weitz : ibid. S. 401.
(88) Hecker : ibid. S. 85 f.
(89) Hecker : ibid. S. 86.

(追　記)

「ズライカ書」その他から引用した詩には読解の便宜上飜訳を付した。それには、主として茅野蕭々博士のものを借用し、それに私なりにかなり勝手な変更を加えさせていただいた。が飜訳はあくまでも便宜上のことにすぎない。飜訳とは原義をそこなわぬように別の国語にうつすこと、できれば原作のリズムにも近づけることであって、それ以上に飜訳の理論などはありえないと私は思う。殊に詩にあっては、ぬきさしならぬ詩語が他の言葉におきかえられるなどということはそもそもありうることではない。訳詩とは所詮まのびのした解釈であって詩ではありえない。もしそれが詩らしいものになっているとしても、それは原詩に類似したあるものにすぎない。私がここで原詩にそえたものもとよりささやかな解釈の試みにすぎない。ところで、このような解釈にもほぼ二つの方法が考えられる。口語の散文にするか、何程か語調の整った古体にするかである。むろん「ズライカ書」にはさまざまな詩形が用いられているから一概にいうことはできないが、われわれがあげた詩においては、すべてはずむような流れるような、そしてくだけた日常的な語法が支配的である。一例として„Hochbeglückt…" の最後の聯を考えてみよう。

Scherze nicht! Nichts von Verarmen!
Macht uns nicht die Liebe reich?
Halt ich dich in meinen Armen,
Jedem Glück ist meines gleich.

この詩句から読者の心にひびいてくるのは、まことにくだけた諧謔の調子であって、ほほつぎのような感じになろう。「まあごじょうだんを。愛したら貧乏になるなどとやぼなことをおっしゃいますな。愛したら、何がなくてもお金持になるのではございませんか。あなたをいだいているときほど幸福なことはございませんもの。」しかしこれでは原詩の簡潔さからあまりに遠い。だからといって、「貧しなどとなたわむれそ。／愛は我らを富ますならずや。／わが腕に汝をだくとき／わが幸にまさる幸なし」ではあまりにいかめしくて原詩の軽快な諧謔味は失なわれてしまう。どちらの試みも全くの片端者にすぎない。私は、古体のいかめしさにはなはだ不満をいだきながら、わずかにいくらか調子が近いことをたのみにして、今はかりに後者に従ってみた。どちらもまことに不完全であるが、前者から後者を推測するよりは、後者から前者の意味あいを想像する方が容易であろうと考えたからである。